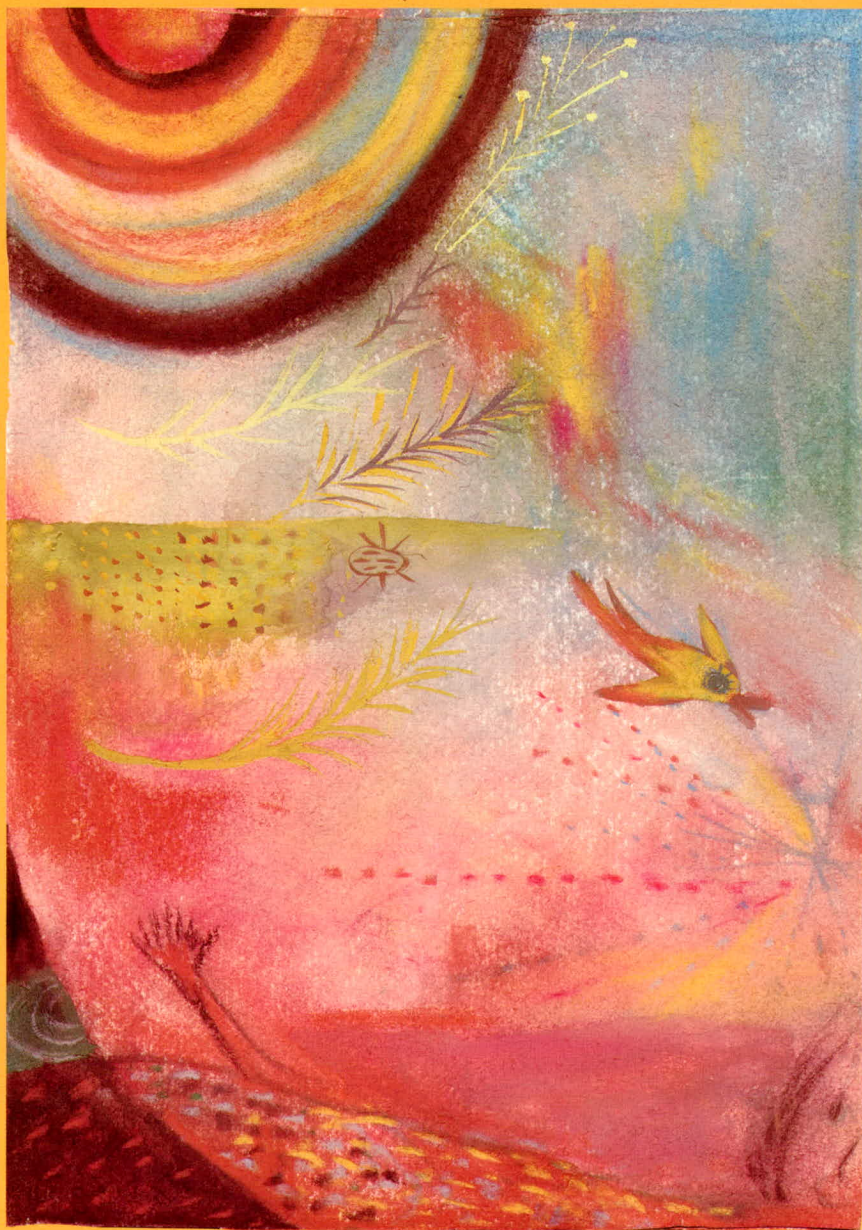


# 帰農の時代に さきがけて

藤田美佳・境毅 編著







帰農の時代にさきがけて

目次 『帰農の時代にさきがけて』

第一部 社会を耕す百姓の仲間と叫び 藤田美佳

出会い・・・ 8

第一章 【滋賀】竹村 弘・段田都紀雄さん

一、就農する・・・ 9

バンブービレッジ／始まりはここから／南米で見たもの／

東京農業大学探検部／八ヶ岳中央農業実践大学校へ

二、のらの会・・・ 14

会の発足／野良仕事／会の生産者として

三、来るまでの話・・・ 21

子供と関わること／質のいい時間

四、良い仕事があった・・・ 24

採卵養鶏／これから

五、本当に暮らす・・・ 31

格好いい百姓／本当に暮らす

第二章 生産者の声（一）

等身大の農暮らしを 竹村 弘……………38  
何ゆえに百姓になったか 段田都紀雄……………42

第三章 【奈良】水越寛宣・塚原省一さん

一、産消提携運動……………54  
食べもの学校とは／生産者代表／引き売りの頃  
二、経営を考える……………60  
家族経営／農家出身／新たな試み  
三、奈良の消費者……………64  
四、気に入った圃場……………65  
新規就農第一号／都会の生活  
五、ちようど十年……………71  
会社を辞めて／研修生と共に  
【香川】小野裕次さん……………75  
奥山から／販路を開拓／変遷を重ねて／自然体になる／  
土地を求める／百姓で基盤を



第五章 農業をすること……………87

土地探し／野菜を食べる／田舎暮らし／強い思い／百姓を志向する

第六章 生産者の声(二)

ムラはどうなる 水越寛宣……………100

自然体でゆこうよ 小野裕次……………104

第二部 消費者はいま 境 毅

いきさつ……………110

第一章 枚方・食品公害と健康を考える会……………111

小林美喜子さん、俊雄さん／日本有機農業研究会(有機農研)／

枚方・食品公害と健康を考える会／「会」の基盤の安定化

第二章 医食農共生ひろば……………118

共生ひろばの発足／有機農研京都大会

第三章 生産者の声(三)

コンテナ通信より 中嶋泰人……………121

第四章	奈良食べもの学校 後藤勝子さんのお話	130
	会員の拡大と活動のイメージ／会員の規模について／会員の力を引き出す／ 農協出荷の問題点／配送のシステム／援農	
第五章	世代交替	142
	「会」の現状／「会」の将来／「会」の認証への取り組み	
第六章	若者たちはいま	148
	ニューススタートとの出会い／人が育てなくなった／農業学校の再開	
あとがき		153





第一部 社会を耕す百姓の仲間と叫び 藤田美佳

## 出合い

私は「農業やりたーい」と口ばかりの二十六才。あれは、大学の農学部を卒業した一九九六年三月のことだった。ぱちぱちと音を立てる暖かい薪ストーブを囲んで、招待されたのは、竹村さんの畑、名付けてバンブービレッジ。

竹村さんが語る。

「なんか貧乏百姓続けてんの、こういうふうにおいしいもん作れたっちゃうことがあるし、色んな要素があるな。ほんさかいにまだできて、みたいなんて、いつつもそこらじゅうにあるな。探し方やけどな」  
段田さんが続ける。

「新規就農したい人、今みな安定してるから、安定したポジションから何か思い切る時にはダイナミズムが出てこないんちゃうか」

「え、農業をしたいわけ？ 年がいくほどできなくなるぞ」  
と水越さん。

この出合いが私にとって、農業をすることに対する思いを改めて考え直す機会になった。農業の現状が知りたくて見てきたもの、実習農場や研修先の田や畑などからは想像し得なかった風景がそこにはあった。

# 第一章 【滋賀】竹村 弘・段田都紀雄さん

## 一、就農する

### バンブービレッジ

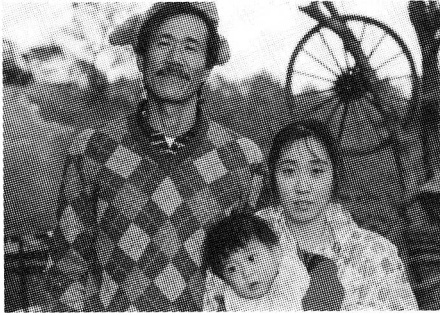
琵琶湖大橋の西側、JR堅田駅から車で約十分走ると、大津市伊香立南庄という石垣の多い集落がある。その細い坂道を山手へ入り林を抜けたところに、見晴らしの良い高台が広がっている。西に比叡の

山々、東には遠く琵琶湖が望めるので初めての訪問客は感激する。すぐ眺めがいい。

田んぼの間を通って南側へ谷づたいに降りて行くと、竹村さんの畑に到着する。入口に掛けられた柱の門板に、まず気付く。

「心貧者不許入門」

彼がこの地を借りて、仲間と共に入植した時作ったものである。ちょうど正面に家が見える。家といっても、電気やガス、水道、電話のない建物である。冬場なら屋根の煙突から煙が出ていて、読書に耽る竹村さんが出迎えてくれるに違いない。風がビュンビュン吹き荒れてもびくと



竹村さん一家 (94年)



もしない頑丈な造りだ。

同じ段にある作業小屋の隣の堆肥場から、下へずつと続く段々畑を一望する。谷に沿って色んな形をした畑が、私は好きだ。段々の横を通って柿やレモンの木を過ぎて一番下は、手植え手刈りの田んぼ。そこに立って見渡しても民家や道路は見当たらない。桃源郷のようなこの場所で竹村さんの十七年が過ぎた。

始まりはここから

九八年現在から数えて十七年前のことだった。彼は二人の大学時代の友人に声をかけた。

「土地が見つかったので一緒に百姓をしないか」

田んぼとはいえ、十年以上耕作されていない棚田が十枚余。竹藪や葛に覆われて、ほとんど原形をとどめていなかった。三人で、竹の地下茎や葛根を掘り起こす開墾生活が始まり、一枚一枚と拓かれていった。仲間の一人は、後に詳述する小野さんだった。竹村さんと小野さんは東京農業大学探検部の同期で、当時は彼らの後輩たちが作業の応援に来てくれたという。

「今思えば、元々の地が、上さえきれいにしたら何とかなるような地力のあるところやったからまだ良かった」

何もないところから何でも作った。作業小屋も家も、建てた。

「この建物が三つ目やさかいに、最初のは竹で作った小屋やったな。小っさい小っさいやつ」

小野さんたちがここを離れた後も一人でやって来た。その頃を振り返り「土と健康」に寄せた言葉。

これからここで念願の百姓ができると思うと、雑草の一本一本でさえ愛おしかったのを今でもはっきり覚えていてる。

## 南米で見たもの

竹村さんは農大に入った動機を、アマゾンに移住するためだったと語る。当時拓殖学科という、移住を目標にしている人のための研究室に入った。二十代の最大のテーマが「アマゾンで暮らす」こと。研究室で学問をして、探検部では体力をつける。探検部二十周年を機に、ブラジルへ移住のための調査をかねて渡る。アマゾン川を下るチームを組んで下見に行った。

「当時はシルクロードブームやっつてな、アマゾン最初低かってん。俺が住みたいさかいに、これを二十周年にせんで、どないすんねや、ちゅうてばーつと盛り上げてよ、うまいこと結び付けたんや。僕は両方で、二十周年記念活動とブラジル実習を含めて行ったんや」

彼自身は半年程体調を崩して療養しながらの旅だった。後半ボリビアの胡椒園で半年間草むしりをした。一日一ドルの約束をつけて働いた。アマゾンには、土と共に生きられる牧歌的な姿があると思っていたが、そこで目にしたのは、現地の労働者がわずかな賃金で使い回しされるような南米の農業だった。

「胡椒使う時はな、世話になった人のことと思って、いっぱい使ってんねんけどな、胡椒の収穫は人海戦術なんや。機械で出来へんから。収穫に、現地の子供とか連れてくるねん、時期になると。たばこ一箱買える

か買えへんか位の賃金で。で、自分の農場にブタ小屋みたいの作って、収穫の一ヶ月位そこに住み込みさせて。まあ、あれがなかったら、あの値段では出来てない」

イメージが根底から崩れていったという。

「ほの時点で、ここで一生暮らすの辛いなという雰囲気の中で、もう芽生えとってんけどな。次は日本の過疎地やな、ちゅうのな」

### 東京農業大学探検部

「探検ていうか、ま、わからんけども、民俗学とか地理学とか『こんな見方もあるで』という世界観をさがす様なことをしたんちゃうかな」

東農大探検部は他大学に比べ農業を主目的としてこだわりの持ってきた歴史がある。山登りや川下りをはじめ、農村調査の項目もあった。

「農大の探検部には色んな幅があつて、どうゆう訳か、僕と小野だけが百姓が好きやった。ものすごい、土着にこだわった人間なんよ」

当時様々な名前の付いた、百姓にアプローチするという団体が農大には多かつた。

「『大地と対話する会』とか、二十位あつたんかな。僕らは全然一歩置いて、シビアに行こう、ちゅうのがとりあえずあつてんけど、僕と小野が喋って『ほうか、お前も百姓したいんか、僕も百姓したい』て

いう話で『百姓ええなあ田舎てええなあ』て二人で色んなところ行ったん」

東京で、有機農業を先駆けた団体がリアカーで無農薬野菜を引き売りしていた時代である。

「そんなんは、ものすごい感化を受けたな」

下宿に野菜を買い込んで後輩と食べた。

「いかに早く百姓するかが格好いいと思つてたさかいに」

有機農業という言葉も一般に知られていない頃だった。

「僕らはものすごくそれに注目した。答えとして百姓しかないやろ、と。それは農学徒やったと思う。頭ではわかっている。わかっていることを体現して永続的に、普通に、すること。どっかで温かい椅子に座つてもええのやけども心配になるやん、農民が。生産してる人が、ちゃんとしてるかな。そんな心配するより自分でした方が早い」

ハヶ岳中央農業実践大学校へ

彼が「百姓ていいな」という志向を持ったのは少年の頃にまで遡るといふ。一九五六年滋賀県日野町に兼業農家の次男として生まれる。おじいさんの野良姿に憧れる。

お金のいらんような暮らしが出来たらええのにな。

小学校の卒業文集に残した文である。ほかの仕事をしたいと思わなかった。学費を稼ぐため京都市の消

防士を三年、そして農大へ。

「とりあえず、何か物を作る、とにかく食べるもんを作る仕事をしたいな、ちゅう」

どこでどういう風に百姓するか、土地を探すのに時間は要るとわかっていた。バイクで西日本を探し回った。熊本での住み込み実習を経て八ヶ岳に一年間研究生として行った時、二十六才。農業技術を得るためだった。ハードなカリキュラムだったが、畑地を五反位実習に使うことが出来た。

「それは非常に大きかった。具体的に。ここ出たらどっかで耕すねん、ちゅうのがあったからよ、自然農法やっててん。こんなもんか、ちゅう感触があった」

竹村さんが八ヶ岳に在籍していた頃、ちゅうど小野さんは渥美半島の有機農業実践農家で住み込みをしていた。

「『人間家族』ちゅう小冊子に小野が書いてるのを読んだん。『百姓をやってます』て書いてるのやん。ほんま涙出たな。で、その小野を俺は渥美半島のところ行って引っぱりに行ったん。こっちへ来い、て。俺は土地を見つけたから、て。ずーっと何年かそんな動きしてたな」

八ヶ岳を降りて来た時は二千円程の現金しか持っていなかったという。でも何の不安もなかった。

## 二、のらの会

### 会の発足

竹村さんと、のらの会のおばちゃんたちが出会って十六年間、毎週野菜の配達がある。当時、新興住宅地のローズタウンに田園風景を求めて来た人は多く、堅田からバンブービレッジへ提携のための会を発足するのに時間はかからなかった。ある人の紹介だったけれど、すぐに二十人、三十人になって最高五十人位になった。

「そんなんも全部作れへんなあ、と思ったりしたけど増えるっちゅうのはものすごい嬉しいことやさかいにな、持ってた」

「まだ会員さんが十五人位の頃に、みんなで文集のような冊子を出した。題は「僕と私たち」。そこには就農二年目の竹村さんの意気込みと会員さんの熱い期待が込められていた。

「いつも初めて来たはった人に出すねけどよ、これはね、農業普及所が、僕が貧乏やさかい、これ書いたら三万円やる、て言うさかい書いてんけどな」と言いながら見せてくれる。

「今たまりに読み返すねけど、なんでこのまま行へんのかな、と思ったりするんやけど。めちゃくちゃシンプルやねん。神話的なことやけど」

### 竹村さんの巻頭言。

物語は、これから何年か前、東京の三畳の下宿で「めざせ独立自由農民」だの「自給自足」だの「笑顔おはよう感謝おやすみ」などとやたらめったら破れふすまに張り付けて悶々としていた頃のこ

を思うと、まがりなりにも就農二年、心地よい疲労と理解ある人たちの中で過ごしている今はありがたいことだと思えます。

そんな今を思うにつけ、鍬を振るえる土地を貸して頂いた地主さんや、野菜を調理して口まで運んで頂いている人たちははじめ、多くの心ある人たちのおかげと、まさに「笑顔おはよう感謝おやすみ」です。

もとより、自ら、農薬や枯葉剤や、微生物いじめの即席肥料を使うことなど、我百姓世界には存在しませんが、大気汚染、酸性雨、空中散布等による地域的な毒の使用による影響、種子の問題等々、自己満足的に完全無農薬のみを追求してみてもせんないことです。ましてや、どこかの国の原発事故で放射能入りの雨まで降る時代です。奇を銜うことなく、注意深く、そして大胆に、何が本物か、豊かさとは何か、見極めながら歩みたいものだと思います。そんな意味でも野菜（食べもの）から色んなことがクリアーに見えてくるのではないかと考えます。その野菜を作る人間もまた、澄んだ五体をもつてと思いつつも、甚だ遠いことです。

世が世なら、かっこうが鳴き始めた、種蒔きしよう。今年は大雪、もつと豊作にと豊年万作の村祭りの一夜の美酒に酔いしれたり、ただ農にいそしんでいたらいいだろうし、またそれだけでも余りある喜びを感じられる営みと確信しますが、この時代背景です。我々は、今の世の中でとても大事な位置にいると思います。言わば選ばれた人間。お互いさらなる精進をしたいと思います。

思い入ればかりの自称百姓にさじを投げることなくさらなるいい関係を。

今の貼り紙は、賢治の「農民芸術の興隆」や、野菜会員名簿や、安藤昌益の名言や、バンブービレッジ見取り図や、作付計画表やら閑居もまた息づいております。

最初からの人はみんな畑に行つて、そこで竹村さんのバンブービレッジをみた。こんな野菜、こんな畑、その主人、というのを肌で感じた。

「僕最初にずっと、畑に来てくれな野菜は持つて行きません、てやつてたん。ここで僕がこういうのやつてるから、ええか、てゆつて、みんな最初の人は来てくれた。ほうゆうもんや、ちゅうか、ほうゆう流れやつてんな」

食の安全を求める声の高まりの中で、意識の高い消費者と生産者が結び付いた時代。

「とりあえず足を運んだ、ちゅうことと感想を述べた、ちゅう、あれは大事やなと思うな。今でもそういう話出来るからな」

野菜の価格も何も決めてない期間が十年位あった。ずっと会の宣伝もして来なかった。

「決め事してへんと、よそからは入つて来られへん、ちゅうのがやつとわかつたけどな」

竹村さんが、有機農業をやっている所へ研修に行く前には、会員さんがカンパを集めて持つて来てくれた。

「美しいやん、そんなん、なあ」



## 野良仕事

畑は耕地面積にして約三反歩。年間四十種類位の野菜を露地で栽培する。春先に、畑で生けてあつた人参を食べさせてもらった。

「さぶい年はな、すも入らんとな、ええねやわ。でな、どうしてもこう全部が赤うならへん。これはな肥効やねん。一気に効いたらな、ぐつといくねん。年輪やねん。僕は、ほう思うわ。科学的なこと、ようわからんけどな。例えばな、両側に油粕びつしり置いたんと、堆肥置いといたやつで適当にしといたんと、芯つぽいやつがな、赤の部分がな、置かへん方が徐々に、くつくくつとなる。作つてる感触やけどな。で、ほういうなんは、一人で楽しんでる」

ずっと売上は年間二百万前後で来た。もちろん天候加減で不作の年もある。それを含めても苦楽の楽と  
言い切る。

「今年レタスあかなんだわ」

「玉葱な。玉葱は奥深いよ。旬のことさ。干して何ヶ月とか。最初穫つた時、甘味乗らへんやんか。結構秋前とかな。一番美味しいと思うけどな」

米は四年目。粳米うるちの契約栽培を始めた。自然、農法等色々な試みがなされる畑。

「米はだいたい野菜と違うけど、不耕起の、堆肥だけは置くねんけどもほんまに表層の土壤の草だけをちよつとかき回す、ていう意識でやって、雑草のことが気になるんよ。兼ね合いが難しいのよ。良いとこ

をどれだけとるか、という部分で、根域に微生物が集まって来るんやけども、その良いとこだけをとりたいさかいね、農民としては。面積の中で良い所だけをとる、その作業に手間が要るんやね」

のらの会へ出荷の日は、野菜を収穫して夕暮れ時あわてて仕分けする。

「ままごとしてみたいやろ」

月曜日と木曜日、消費者のおばちゃんたちの顔が嫌でも頭に浮かんでくる日だ。

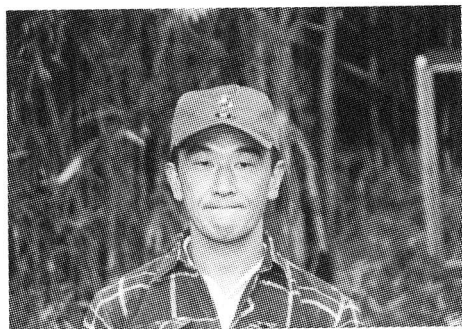
「野菜の好き嫌いもあるしな。ほんつまに感激してよっぽど美味しかった、って時は、次の時メッセージがあるわ。『こないだの西瓜すごく美味しかったです！』てな」

## 会の生産者として

会の卵の生産者として段田さんがやって来たのは十二年前だった。平飼養鶏のできる場所を、バンブービレッジから程近い伊香立途中町に見つける。その頃竹村さんは会を引張り色んな展開を構想していた。

「せやけど、段田さんが来はってだいぶなるけど、それまで一人でやって来たやんか。僕はええもんやなあと思うわ。たぶん人間でそんなもんやと思うわ」

二人で朝市を企画したこともある。直配について段田さんは、産物を中心に人と人とのやりとりが出来、その産物に関する評価や要望が直接伝わると考える。経営に関しては、自家用の延長で出来る規模が適切だという。



段田さん (94年)

「専業でも、何か松葉杖ちゅうか、専業をやるための何か、ま、それも結局兼業になんねけど、それもあり得るけど、一番避けなばならないのはマンパワーを超える、ちゅうことやと思う、きつと。やっぱりもう自分の手、マンパワーを超えるような方へ走ったら、もうそれこそほとんど工業といっしょになってしまってる。自分の日常が。結局安売り競争の様なことになる」

会に提示した卵の値段は四十円。段田さんが考えたこの値段。でも定例会ではどうしても話し合いになる。

「卵四十円で、これやり出した時から僕はその姿勢やからさ。『じゃ、安しよ』ちゅう話は僕は絶対せえへん。別に二十円でもかまへんねんけどな。そういう話ではないねんけどな」

「僕、段田さんはすごいと思たよ。二十円でも十円でも三十円でもいいねんけど、最終的にお金の話になってしまいうんか」と竹村さん。

卵に関してはよく黄身の色のことが言われる。着色料の話や説明までしなきゃいけない。

「たまたま食べる、ていう共通点で出会ってんのやったら、出会ってる人たちと一緒に今生きてる時間空間のことを考えてみたい、という思いはあるんやけどね。生産者と消費者は同じスタンドポイントには立てないんちゃうかな。自分の生活スタンスをどこに置くか、という

問題で、安全な、とかではなく。それぞれの持ち場所があるし、求めるのは奇妙やと思うよ」  
会の運営に対して二人でシーソーゲームのような状態が続いていたこともある。どっちかが熱っぽかったりそれが逆転したり。

現在のらの会の会員数は二十五人。消費者の立場から、買い支えて会員を増やすように色々考えたり、忙しい中で事務等運営に携わる。提携の難しさがにじみ出る。

「僕んとこの組織力が全然ないさかいな。ただある種意図した部分もあんねんけど。要するに、その、正しいか正しくないか、とか良いか悪いか、とか、それはまあ時間とか歴史に委ねるとしても、現実的にどっちか、ちゅうことはあるやんか。僕らいつも判断してるからな。何か買うにしても何にしても。結局は情報量、ということやろな」

### 三、来るまでの話

#### 子供と関わること

「自分が何したいんか、わからん人生やったな。それを模索してきた過程というかな。何をしたくないかは、わかった。何していいかわからへんから、その度手応えありそうなことをやってた、ちゅうだけのことやろね」

段田さんはそう振り返る。

「したいこと見つかるんやろか、という焦りや不安は募っていきよった。二十才位から、子供と関係あるな、という予感があったんよ。大人なんて終わってしもた人間にしか見えなくて」

一九四九年京都市生まれ。アルバイト時代を経て二十五才の時、児童養護施設に就職という形で児童指導員になった。子供と関わることに興味があつた。そして人生の先輩として子供たちを励まし続けた。

「大方の子供は自分で生きていかないかん、ということがわかつてるわけよ。そうなった時に何がよいか、といったらやっぱり、より良く生きていこう、ちゅう生命力。そのことをたぶん鼓舞してた。できるだけそういう力を卒園するまでに付けとって欲しかった。『暮らし』ていうのは当然受け身になるやない。そこでなるだけ自分で自発的に自家発電して生きてって欲しい、ていうことかな」

子供の親がわりの様な仕事で二十四時間の暮らしだった。

「児童指導員という名目やけど、子供に関わるあらゆることが自分の仕事内容になるわけ」

病気の看病、ビー玉の相手、市との行政交渉ときりがない。しかし十年間の勤めを辞めたのは決してそれが嫌だったわけではない。子供がたくさんいて物理的な限界を感じた。

「その子だけのもんにはなつてやれへんわけよ。病氣して寝てるのに、ずっと居てやるようなことも出来へん」

あれこれ考えることばかりで、どっちつかずの状態に耐えられなかった。

「最後、僕は子供より元氣じゃなくなつて、いい仕事が出来なくなつて遊べなくなつて。あすこにおける限

りは子供よりパワフルでないと、と思てたし」

次の展開はとにかく一旦終わらないと始まらない。

「子供たちは、自分らのために一生懸命やってくれた、とは気付いてみたい。僕は、僕に出来ることはあいつらに夢を与えてやることやった、という思いが残ったままなんや」

その思いを抱えながら一生懸命生きることだ、と段田さん。

## 質のいい時間

三十八才の時だった。「百姓をしよう」という所に、まるで準備されていたかのように辿り着いた彼は、鶏の試験的飼育を経て途中へ移り住むことになる。型枠大工、新聞配達、機械製図、乳製品配達等、生計のためにやっていたアルバイト生活に区切りをつけた。

「しんどかった。百姓しよう、という所に行き着くまでが、後半になる程焦ったな。息できそうなどが、そこしかなかった」

二十代に始めた岩登りに例えてその頃の気持ちを語る。

「『危ないな、不安定やな』と思て、こう手を掛けようとしたらポロツと行ってよ、ほんでバランス崩したから思て次の足場をくつと掛けたら、またポロツ」

自分の中の一番不安定な状態から抜け出して、心は決まった。不安なんて何もなかった。

「自分の呼吸で、自分の心臓の鼓動を保ちながら生存できるというステージや。その心臓の鼓動にぴたと合う質のいい時間が欲しかった」

動き出せば状況はついて来た。幸運にも家とフィールドが見つかった。のらの会の生産者として養鶏に携わることも決まった。

「非常にいいタイミングだったん。僕がこの暮らしを選択してそれに乗っかっていく状況の中ではとても鶏飼いというのが役に立ってくれたと思うし、取っかかりとしては非常に僕はラッキーであったと思ってるのよ。据え膳みたいなもんで、一年間の間には十羽試験飼育することも出来たし、通い百姓はしたし、順次規模拡大することも出来たし、まして販路も見つかってた」

奥の村で平飼養鶏をしていた人が村から出るというので、鶏百羽を譲ってもらった。農機具などは転業する人から安く仕入れた。コネを当てにせず資本をかけず、もらえるものはもらうというやり方で進めた。鶏舎や餌を作るのに使えそうなものを探して、廃材などをもらいに行ったりカントリーエレベーターに出かけくず米を快くもらえるように工夫した。段田さんの人柄が周りの人たちを動かしてしまうのだから。幸運は熱意の賜だ。そして、何よりも竹村さんに出会うことが出来た、と彼は語る。

「自分の近くに同じような軸を持った人間がいると、ものすごい力になる。一人やったら不安になるやろなと思うね」

#### 四、良い仕事がしたい

##### 採卵養鶏

段田さんが求めた質のいい時間空間は、半分はかなえられた。

「今のステージならば息はし続けていける。その上で自分が何が出来るかということを考えて続けていく。この状態からしか次のステップが踏めない」

空気、水に恵まれ動植物の営みの中で暮らせる。例えば犬でも蜘蛛でも草でも、自分と等質に思えるよ  
うな、そんな環境に暮らしている不思議を感じながら。冬の好きな段田さんがその密やかな景色を雑誌に  
寄稿した文章がある。

##### 春を待つ里

二月四日 晴れ 空気が冷たい。

屋根の雪はおおかた落ちたものの、その落ちた雪が陽なたでまぶしく光っている。

その下に在る予感——それが、田畑の土手や畦に残った雪の下にも隠れていることを、ぼくは知っ  
ている。

口の中でニガ味となって蘇る… フ・キ・ノ・ト・ウ。

田の荒起こしは耕耘機でやるけれど、自家用野菜のそれは、平鋤をよく使う。低温の日が続いた午



前中などに鍬を入れると、北国のようにはね返すような堅さではないものの、少し凍った土の感触はやはり早春のもの。

いずれにしても季節というのは、たとえば冬の土の下に、春の芽吹きがひそやかに、確かに進行しているような、油断のならないものである。

子どもの頃の記憶。火鉢の上の薬缶の湯気と、炭火の黒の赤白に変わるのが、静かだった。いま傍らに火鉢はないけれど、ストーブが登場する前と同じ静寂が、ここに在る。

静動相和スル。勿論、静カデアアルハズノコノ季節ニモ。

猿殿が裏の林で騒ぎ出す。夜には猪が、家の傍まで土掘りにやって来る。両者は鴉と並んで田畑の曲者三悪。他に鳶、雉鳩。時どき見かけるのは鼠、鼬、狐。啼き声や跡はあっても、姿を見るのは希というのが鹿、雉子、土竜、羚羊。音に驚いて見回すけれど見えないのが啄木鳥。木肌を剥いだ爪跡ばかりで、出逢ったこともなければ、出逢いたくもないのが熊。今はまだお眠み中だろうけれど……。

この他に多数の小鳥や虫の仲間がいて、その営みはもつと豊かで活動的である。それ以上に植物たちの生態は実にダイナミック。それらは重厚な広がりを持っていて、そこには正しい時間が等しく流れている。何よりその世界はそれぞれに「開いて」いて、「つながって」いる。

「不思議の国」は、びわ湖大橋からほんの少しのところにある。

今は雪の下に隠れていたり、蛹で眠っている生きものも、やがて賑やかな活動を始める。木の芽、

草花、土中の虫。蜂や蜘蛛の仲間も忙しくなる。蜘蛛がせっせと網を掛ける。鳶や鴉が蚯蚓をほじく。草引き仕事の目の前で蜂が花粉を集めてる。

そんな時である、「あの」妙な感じにつつまれるのは。

永らく分らないでいた「あれ」は「共生の実感」あるいは「対等の自覚」。考てみれば不思議でも何でも無い。伎楽面や土着劇、各地に残る伝統芸能が「その」あかし。動植物はおろか、鬼や魔もの、聖霊たちまでもがニンゲンと同次元、同質に歌い踊っていたのは、遠い昔のことだろうか。今でも、ここにも「不思議の国」はある。

軒先から垂れ落ちる雪解け水の音。先ほど来の、屋根の雪が落ちる音も続いている。このぼくの住んでいる家屋は百歳を超える典型的な農家造りである。平家茅葺きの上に波トタンをかぶせてある。気密性乏しく、寒風忍び寄るこの季節は、決して居心地が良いとは言えない。暖房は卓炬燵だけ。暑けりゃ肌脱ぎ、寒けりゃ重ねる。寒い寒いと言いながら暮らしている。

火を焚くのが好きだ。と言っても、今西錦司さんのように、雨降りの中でも焚ける技能を持っているわけではない。藁、竹、葉、枝、木、それぞれ良い。熾（おこ）りぎわ、京都では熾（いこ）る、と言った。燃え盛り。やがて勢いが衰えて、燠の状態になった頃からが良い。じっと見つめているのか、ぼんやり眺めているのか、あるいは何も見てないか。焚火もやはり、この季節のものである。

段田さんにとって、鶏飼いは自分のめざした質のいい時間を確保するステップになった。平飼鶏舎の管理、餌作りでの苦勞もあったが敢えて自分の卵は「普通の卵」と言った。

「口に入れる食物作るんやから、ただ怪し気なもん作りたくない、てだけの話」

当初、卵の売上げが月約三十万。四年目には鶏舎も五棟になった。奥さんも勤めの合間を縫って鶏舎に通った。ヒナの育成、緑餌を含めた飼料作りに配慮し、四百〜五百羽の経営規模だった。経済的にちよつと欠乏した位の生活の方がいいと感じていた。採卵養鶏は、換金作物で品質管理が比較的しやすい面がある。住居と並んで同じ位古い造りの作業小屋で自家配合飼料を作る。

「鶏は餌やって水やったら卵産みよるけど、鶏飼いを通じて得たものといえば、鶏糞使えることやよそで鶏飼いしながら暮らしてる人のこと知ることが出来たということかな」

四年程前に一度辞めかけたことがあるという。別の展開を考えてのことだ。

「それまで卵だけ出してたんを、できればその生業を中心にしてその消化方法として肉鶏を、という話があつて、採卵養鶏は縛られるから肉鶏を料理にして出そうかな、ということであつたんや」

その時羽数も百羽程に減らしたため段田さんの卵のお得意さんが大分減つた。収入のない時期もあつた。今は、鶏が相手の養鶏から土相手の米作りへと重点を置き換えつつあつた。

「質のいい時間が欲しくて、ここへ入って、でもその時間があまり出来てなかつたんよ。そこそこ舞台設定は出来たわけなんやけど、まあ十年で。自分が歩きたいな、と思う方向へ視線をやつて、あるイメージ

を想定して生きてるとしたらな、ほぼその通りに生きてんのやろうと思うわ。けど、目的を立ててそこへ効率良く邁進する、そういう能力には欠けてた」

段田さんにとって壁にぶつかった時進む道を選択するプロセスが最も重大なことだった。

「その間に、暮らしの中で色んな関心事があつて複合的に絡んで、まあ、もつとシンプルに自分のしたいことが実現出来るような方法はあつたと思うねん。せやけどそれをして来なかつたということは、まっすぐ歩くこと自体が目的というよりも、その度その度自分のベストじゃないかもしれないけど、どういう風に行動するかが問題やつたし、そこで自分がどう立ち回るかというのが大事だった」

これから

今まで自家用にやっていた米作りを本格的にしたいと思うようになった。段田さんの田んぼは何枚にも分かれていて面積にして二反程。

「自分の時間を確保するため、それを実現するために鶏飼いでたら出来ないか、といえはそうじゃないの。鶏飼いで、そこそこの規模にして、お金ももつと入って来るようにして、人なんか雇えば出来るわけ。販路も開拓するやん。結局の所はお金に対して執着心がないのといっしょで、熱意を持って実務能力を行使してやり続けられる程のものではないわけ」

熱意を持てる対象を選ぶ段階に来ていた。

「単純に、鶏相手にしてるより土相手にしてる方が好きやな。動作として田んぼとか畑の仕事してる方が好きやな。一番基本的には全然変わらないんやけど、自分のための時間がどちらが確保しやすいかが違う」  
養鶏は縮小状況にあった。そして生計の土台をアルバイトで作りながら、米作りの出来るフィールドを確保する構えだ。

「お米もたぶん、そこそのものだと思う。百姓仕事ってエンドレスで、これでいい、ちゅうのはない。また来年で、そういうことやと思うねん。技術そのものはそんなに、一程度ここまでやれば、ということもあるんよ。エンドレスだとしても僕は米作り、ちゅうのは手段にしときたい。自分のやりたいことを保障してくれるような生活基盤として程々でいい」

集落での圃場についての話し合いにも精力的に動き出した。基盤整備された圃場を集団営農できれば、というのが願いだ。毎日のように会議を持ちたり折衝に出かける苦労。人と人を繋ぐことが段田さんの宿命のようにさえ感じる。

「そこその仕事をしようと思たらやっぱり絞らんと。うちの村のことは、そうせねばならない、というかそうしたい、というか自分の関心のないことはしないし、僕自身の暮らしとも関わってるしね」

段田さんがずっと想ってきた、そしてこれからも想い続けていく「いい仕事」とは。

「僕は何して来たらう、て思う。そのシチュエーション、シチュエーションでその度ともかく一生懸命生きようとしてた。一生懸命その物事にあたって来た、ちゅうだけだね。今後もそれは変わらへん。僕の表

現でいう仕事では、報酬があるかないかなんてのはほとんどどうでもいい。自分がしたいことに一番近い形をどう取ればいいのか、これから僕の中で吟味されていく。早いところそういう状況を作りたい」

## 五、本当に暮らす

### 格好いい百姓

竹村さんは毎週金曜日、大阪に野菜を出荷、配送の仕事をする。「枚方・食品公害と健康を考える会」という産消提携の会は二十五年の歴史があり、彼が就農する時からの長い付き合いになる。

「僕自身は、このメインにもなれへんし、なる気もないし、距離的にも近くで自分の会を作ろう、思ってたし」

事務所と倉庫では、週三回の配達のために会員のおばちゃんたちが仕分けや事務仕事をこなす。扱う品数も多く以前はほとんどなかった加工品が増えている。地元で三人の生産者、会員数二百の会の運営は消費者と生産者の強い結びつきで成り立っている。

「おばちゃんたち、きっちり色んなことしたはるけど学生バイトより安いんちゃうか。それなしでは、やっていけへんのちゃうかな、こんだけのもん扱うと」

会員の中から有志を募って毎回パートやボランティアで作業が進む。朝の仕分けが済むと配送へ。配送は五人のうち四人までが生産者である。



竹の子学校（98年）

「僕等は自分の野菜も乗っかってるからまだやれる部分もあるけどな。専従のことで、どこの組織も悩んでたみたいやけどな。配達の仕事だけの人やと、ある種の生産者側の意識を持ってやってる部分があるし、自分が百姓してへんから、より理想的なこと求めてたんやろな」

配達の仕事を専従でするとなると給料の問題が出てくる。今は、事務や配達等、各々一回の仕事に対して金額を決めてやっている。会にとつても竹村さんの存在は大きい。

「僕はのらの会でさばききれへんの持って来ることもあるし、その代わり持って来る時はもう一番良いのを持って来る、みたいなんで、今はお互いの関係もわかってくれてるし」

それから、月に一度の「竹の子学校」。三年目である。京都や大阪から街の子供が来て、寺子屋風、暮らしを遊ぶ学校だ。

「そんなん、竹の子学校ゆうても見切り発進もいいところでよ、おいで、ちゆうて、まあ赤字にならんで出来たらええようなもんで、やって、一年二年して、何も思わへんだらやめよと思ててんけどな。結構

ええなあと。ええなあ、ちゅうのは経済的にやなしに、もうちょっと付きおうてもええなあと思てる」  
春には田植え。年間を通して田の草取りや稲刈りもする。

「おっちゃん、もういややー」

野良仕事はすぐ飽きて、蛇を捕まえたり草花で遊ぶ。

「田植えの頃やと、ほかにも水張つてある所があったり小川があるから虫とりとか水生植物とりに行く。

『ゲンゴロウ探せ』という指令を出して、な」

「せやし、子供が喜ぶことだけすんのは簡単やねんけどな、なかなか。まあ理科の野外学習版みたいな感じやったら、それに集中したら、またそれはそれでやりやすい部分もあねんけどな」

いつも遊びの話から入って一仕事して、中学生がいた時はお昼御飯の竈焚きもした。

「どうい子が増えてんのかわかれへんけども、例えば家でいっつもゲームばっかしてるからお母さんが思い切つて『こういうところあるから行ってみる?』とかい子若干あると思うけども『何したらいい?』てい子がいんねん。ほんまに、あの、時間を消化する、ていかなあ」

来てる子供はみんな「おっちゃん」が大好きだ。竹村さん家の花乃子ちゃんと羅須太くんもいつも参加する。

「百姓の仕事の合間でな、みんなやったらええと思うわ。畑でな。これ位やったら何とか出来るんちゃうかな」





のらの会収穫祭(94年)

できればもう少し違う形でやりたいと展望する。

「これはこれで楽しんでくれてんねんけども。子供らがな、泊まれるのをしたいねん。材料はいつくらでもあるさかいな。夜に近所のおばあちゃんかなんかと昔話したり」

普段の畑仕事やそこでの生活の中で感じたこと、感性の豊かさのようなことを、うまく表現し伝えられたいという思いだ。

「子供は状況に順応するでしょ。子供で難しいけどすごいと思う。子供と接してへんと大人はアホになるしどうしようもない気はすんねん。子供はほんまに何とかしよう、ちよつと忘れてたらあかんな、と思うな」

#### 本当に暮らす

バンブービレッジの収穫祭は十一月の終わりに催される。

「せやな、我々にとつては個人的に『あー一年が終わったな』ちゆう時やな。なんとかまた十一月が来たな、て」

のらの会や竹の子学校からはもちろん、たくさん仲間とおばちゃん、子供が押し掛けて楽しいお祭り騒ぎ。その準備も大変だ。

「結構いつも毎年一人でな、一週間位、ま仕事の合間やけどな、誰も

評価してくれへんねんけど花を置いたりしてんねんけどな。野菜をな、おばちゃんか洗たり刻んだり味付けしたりするのに持つて行くねん。牛蒡掘らなあかんねん。牛蒡がえらいねん。豚汁やさかいに牛蒡がもう一番味出しよるさかいに」

竹村さんの周辺の状況も少しずつ変わって来た。バンブービレッジにはすぐ隣へ土砂を運んで来るトラックが行き来するようになった。一日中重機の音が耳に障り、畑を降りて行っても押し寄せる土砂の山が見えるばかり。

「僕んとは、ここほんまに良かってんけども、時代の流れ、ちゅうか翻弄されてひど過ぎる部分もあるし。普段の野良仕事とかな、会との関わりとか、そういうことが必ずしも自分を表現してへん、ちゅう気があんねん。でもこれは自分が選んだ状況や、ちゅう自負心は間違いなくある。状況でそうなった時に次に語らなあかんねんけども。十七年目、もうええと。あまりにも、瞑想状況でもないし、違うな、と思いはじめてるの。ちゅうねんな、なんか。あすこ、せわしない、てすごく思てんの」

「ま、簡単に言うとな、真剣に生きたい、ということよ。僕は昔から農本主義みたいなところがあるねんけど、でもちよこつとそうではないねんけど、例えば色んな情報があつて評論家の話を色々聞いて、あーだこーだということやなしに、ちゃんとした大地に根を張った状況で比較判断するような、ほんまにもう感性で答えられる位な暮らしをしたい、と。それは場合によれば往々にして権力に利用されんねんけども、それをも超えるというかな」

竹村さんは何年も前から、見えないネットワークのようなもので繋がる関係ができれば、と思い続けて来た。

「僕んとこにな、井戸掘りに来てくれはった人がいはんねん。その人が言っってはった。『やさしさ』ちゅうのが一番大事やと思いますよ』ちゅうて。今蔑ろにしてる所があるような気がするわ。『やさしさ』てのはほんまに大事なんやないかと。人と人が接するのによ。僕はその人のやさしさを充分受けてるけども、それは井戸以上に良かったわ。で、こういう関係をとりあえず維持せないかんと思うんよ。わかった関係だけやしに」

それから、この一年で自分で田んぼを借りてお米を作ってしまったみゆきちゃん。竹の子学校ではおなじみの存在。仕事場の人たちとの企画で施設に集う親子参加のお米作りとお餅つきもやった。すごくおもしろい。

「例えば我々の余り野菜でゆうたら大家族や二家族の単位やないし、そういう関係やったら余り野菜でもなんぼでも持つて行けんねんやさかいに、こう、何か、杓子定規じゃなしに、食えんねんけどもちよつとこれはなという部分でも、いっぱいあるやんか。そういうとこを僕は広げたいな。もちろんメインの付き合い、ちゅうのはあるけども。実際それでどうなる、ちゅうもんでもないけどな」

そして次の場所へと、重い腰を上げて彼がもつと自分の表現を鮮明にする時は近いのかもしれない。

「ここでも出来るけど全然イメージ湧かへんし、ていうかもうやる時はやらなよ。徹底的にやらな。やる

土壌を作らんと。ここでな、あの人がこういうことをしてる、というわかった関係の中で、おっちゃんおばちゃんと仲良く、なんてのは出来るよ。今まではほんなん真面目な羊の農民さ。何の権力も行使してへん、というか、しない。何故かと言うと、うっとおしい。日常の時間をさいて色んなことをするのが。僕はだいぶ世間に攻撃しててんけどな」

「近代農法のことなんて有機農法してる人はわかってるわけ。近代農法も語りたくないし有機農法も語りたくないし、だから『何々さんが、こうしたはる』とか、堆肥作つたはるのやろか、土耕したはるのやろか、そういう奥底まで興味を持つ人と付き合いたい。末の自然、というかな」

本当に暮らす、とはどういうことを問い続ける。

## 第二章 生産者の声（一）

等身大の農暮らしを 竹村 弘

僕の自慢は、長い間、生まれ育った家のウラ（野山、田んぼが広がっているほう、これに対して民家が集まっている方はオモテと呼んでいた。子供たちが何人か集まると、「今日はどっちで遊ぶ、オモテかウラか」と言つてまず場所の選定から始まったものです）の風景が、生まれてからずっと変わっていないことでした。雑木林や竹藪の前に、平均すれば三畝もないような田んぼが何十枚もあり、その中小川が一本はまつすぐに、もう一本は田んぼの間を縫うように流れていました。それらの遠景には、標高一、一〇メートルの山が、頂き二つ持つていつもどっしりと座っていました。ところどころにある野小屋もバランスよく傾いたままありました。

日本には、農家と呼ばれる不思議な存在の家が今もあつて、専業とか第一種とか第二種とか言っている。現在、サラリーマンの家庭でもなんでも、代々農地があつていくらかでも耕作していれば農家である。ちなみに僕は農家の出身で、僕自身は農家ではない。農業収入以外他にない、専業でやつていても、農協にも入つてないし、水利組合も関係ないし、農業新聞も共済新聞もとつてないし、借地に種子

を撒いているただの自由農民だと思っっている。

この農家、特に兼業農家の存在が、実質上の日本の農業であり、日本の田舎の景観を守ってきたと言えるのかも知れないが、ここにきてその代々の土地の守りをするのもままならぬ状態、日曜百姓すら大儀な農家のサラリーマン息子たち、そして何より、そんなコストのかかる小規模農業など、日本の経済発展の妨げになると言わぬばかりの政策。それならばいっそのこと、家族や親類の食いぶちだけはしっかり確保して、赤字覚悟の農業などやめてしまい、ゆくゆくは大企業に飲み込まれるだろう土地を、「百姓ヤリターイ、自然大好き！大地と共に生きターイ」と思っっているが、いつも傍観している若者に譲ってあげたらどうだろう。

何年振りかで帰省した時、深緑の山を背景に、僕がまだ子供の時からしわくちゃの腰の曲がった近所のおばあさんが、やつぱりその時も手だけは異常にたくましいそのおばあさんが、まったく風景に同化したように、風景と同じように変わらずポツポツと歩いていました。家の中やオモテの方はだいぶ変わってはいましたが、ウラはやつぱり昔のままでした。

農業収入の方が多くなるような魔法のようなことでもなければ、都市や企業に飲み込まれてしまふ、よその国から安い農作物を買うから日本ではもう農作物を作らなくてもよいと思っっている多くの日本人（個人的にはそう思っなくなって、そうしている工業社会に就職している以上同じこと）がはびこっている今こそ、経済中心、経済至上の価値観ではない何かを模索している若者に、その先祖代々の土地を

分けてあげるのです。

その小さな土地で、自らドロップアウトしたような若者が、儲からぬ野良仕事を、はかどらぬ野良仕事を、けっこういい顔をしてやり、貧乏生活を喜んでいような、自信をもって暮らしている姿を見れば、高度経済成長時代を走ってきた人、農業だけで生きていけるはずがないと思っていた人、金がすべてと実態のない生活に汲々としている人たちも、今まで農協だの、普及所だの、学校だの、世間のいろんなところであたり前に言われてきたすべてのものに対して、少しは立ち止まって考えられるかも知れないと思う。

ある年、ウラの風景が変わりました。いつもどつしりと座っていたあの大きな二こぶの山の山肌に傷のように林道が横に走り、その傷を糸で縫うように高圧送電線が何本も通り、もう時代劇のロケをするのは無理な風景になりました。考えてみれば、幼い頃はこの山のあちこちから炭焼きの煙がのぼっていましたが、いつの頃からかそれもすっかり見えなくなっていました。二つの小川にはアユもあがってきてキラキラと光る白い肌を見せて泳いでいたものです。それも今は昔のこととなってしまいました。状況はすっかりと悪い方向へと進んでいました。

今、この国の中で圧倒的に多くの人がもっている価値観、いい暮らし、豊かな生活、より合理的であり近代的なものを良しとすること、いわゆるいい学校、いい会社に入っているいいお墓に入ること、情報がいっぱいあること、情報をいっぱい集めること、ゴルフ場がわが家の近くに作られたら困るけど、そこ

その距離にゴルフ場があつて、そこへ一懸命通うこと、感性よりも経済性の方をはるかに大事にしているような人たちの割合が少しでも減らなければ、自然、環境を大切に、オルタナティブな社会を築こうと合従連衡してみても、それは絵に描いた餅でしかない。今の社会からドロップアウトして百姓でもしようかと思つている若者がどれ程いるのか知らないけれど、耕す土地さえあれば何とかやつてみようと思つている人も結構いるような氣もする。

で、これから百姓したいと思う人は、あまり張りつめず、真つ向勝負のようなことはしない方がよいと思う。農業、化学肥料、除草剤は使わない。これくらいを基本的な姿勢として、生活費に困つたときは、極端に言えば、自然を壊すダム工事や、河川業、農業いじめの企業のアルバイトをしてでもなんとか百姓というベースをくずさぬようにすること。矛盾があつても、大きな理想のための小さな矛盾くらいに考えて、要は種子を撒き続け、鋤をもち続けることが大切なことだと思ふ。

大きな商社に入つて、金にものを言わして右のものを左へ動かし、国民に安定的に電力を供給する義務があるとかなんとか吹聴して、頼んでもいないのに原子力発電所を美しい海岸にいっぱいつくつて、人類史上取り返しのつかないことをしつづけている大電力会社、ゼネコンとか言う、名実共に怪獣のような大建設会社、虚像を実像のように、うそをまことのよう、まことを冗談のように伝えることに使命感をもやしている大情報産業、子供から子供らしさを奪うことが教育だと勘違いしている大教育者、学問という名の権力にすっかりしがみついて何も想像することが出来ない大学者、等々、……それらに



金魚のフンのようにくつついておこぼれに預かっている多くの悲しい人たちに優しい言葉をかけてあげられるように、無理をせず、等身大の暮らしをしていよう。

ついに決定的にウラの風景が変わる事態になりました。圃場整備が始まるうとしていました。個性豊かな田んぼは揃って四角い大きな田んぼになり、川はコンクリートで固められ、写真集に出てくるような傾いた野小屋は消え、昼寝や一服をする木陰さえなく、農業生産物を生産するただけという、主役のない田んぼが、もうすぐウラの風景をつくりだそうとしていました。

そんな日本のあちこちで行われている風景の変化、自然環境の破壊を遠くからながめてなげくより、あぶく銭のなれの果ての貯金のはしくれを、ポランテア貯金だとか言っただけで自分たちの暮らしは何も変えないで、やさしい気持ちになったような錯覚におちいるより、街の中で農的暮らしを志すというむずかしいことを考えるより、単純に農暮らしをしよう。ゲリラのように、はげしく、しつこく、おもしろく暮らす百姓が、世の中にいっぱいあれば、きっと少しは状況もよくなるだろうに。

## 何ゆゑに百姓になったか 段田都紀雄

マレーシアでは旅することを「マツカン（食べる）・アンギン（風）」、「風を食べる」と言う。何

と本質的で美しいことばだろう。二十年前に知っていたら、もっと魂が風を吸い込むような、飄々たる旅ができたろうに。

インド、ネパール四週間。野宿ないしそれに近い貧乏旅であった。帰国後、「何故そんなところへ」と聞かれることがあったが、まともな答えはみつからなかった。答えらしきものがにじみ出てきたのはずっと後のことである。―心の求めに従って行動し、求めたものの正体は後に明らかになってくる―人間行動学の常道にかなっているとは思わないが、どうもこれが自分の行動習慣であるらしい。

はてさて、百姓生活六年目にしてようやく自分の選択の意味（動機、理由らしきもの）が分かってきたように思う。「ことば化」することによって、自己認識以外に見えてくることもありそうな気がするので、ここに明らかにしておこうと思う。

―大切なものを失わないために―これが答え。単純な問いこそ、その答えは複雑でまとまりにくいものであるが、つづめて言えばさういうことだ。では、「大切なものとは？」とたたみかけられれば、直球を投げ返すだけ。すなわち「失ってきたものだ」と。

### 失ったもの―その風景

何も逆説をもて遊んでいるのではない。「高度経済成長」と呼ばれるこの三十年余り、私たちは大切なものの如何ばかりを失いつづけてきたことか。

「食膳に向かつて皿の数を味わい尽くすどころか、元来どんな御馳走が出たかハッキリと眼に映じない前にもう膳を引いて新しいのを並べられたと同じ事であります。こういう開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません」。明治の末、夏目漱石が講演した内容の一節である。ここでは文明開化が内発的でないことから、日本の将来を悲観しているのであるが、文中後半の開化というところを高度経済成長と置き換えるだけで、百年後の現代でも十分に通用しそうな卓見であり、時代の表層を足早に上滑ってゆく今日の有様を如実に表しているのではないだろうか。

時間泥棒と戦って、盗まれた時間を人間に取り返してくれた女の子の物語『モモ』の作者であるミヒヤエル・エンデは言う。「時間とは生活なのです。そして生活とは、人間の心の中にあるものなのです。人間が時間を節約すればするほど、生活はやせ細って、なくなってしまうのです」。冬の今時分、子供の頃ほくは、火鉢の中でほたほた燃える炭火を、飽きることなく眺めていたのを想い出す。黒・赤・白と変わってゆくその有様を、人の一生と重ね合わせていた。

炭の粉がパチパチと音をたてて火花を散らすおこり始めは、いかにも威勢がよい。そのうち黒の集団の中程から徐々に赤く燃え広がってくる。生きもののようにゆらめく炎の怪しげな魅力。熱を放出しきった赤に衰えが見え始め、程なくその外側から白くなってゆく。この時、もたれ合っていた赤たちが、コトツと小さな音と共に崩れる。そして、熱も重さもなくなった白い灰だけになって大往生。別の火鉢にかかるヤカンの湯気の声、柱時計の振り子の音、それゆえにいつそう静かな周囲の空気。―感性

を育むこうした時間が私たちの身辺から遠のいて久しい。

「高度経済成長」の助走は、昭和三〇年に誕生した経済企画庁が発表した「国民所得倍增計画」から始まり、三二年の神武景気で勢いをつけ、三五年の第二次池田内閣に至って加速していった。この時期までに生まれたご同輩なら、まだ充分に豊満であり、活々とした重層構造に支えられた子ども社会をご記憶のことと思う。そこには、様々な登場人物（個性・関係）、多種多様の舞台装置（仕組み・道具・空間）に彩られた文化がすっかり息づいていた。（このあたりの事情は例えば、その幼・少年時代を妖怪たちとくらしした水木しげるの生い立ち史ともいべき自著『のんのんばあとオレ』に鮮やかに描かれている）。亡くしたものの輪郭ぐらいは想像していただけたであろうか。更に細かく検証してみよう。

### 「質」の喪失

人々体の不自由な人、知恵遅れの人、変わった人、それに昼間から酔っぱらっている人、よその子をごやしつつける人、ひょうきんな人、その他様々の「顔」が私たちと共存していたはず。彼らは一体どこへ消えたのか。

道具＝機械は使われるものであるが、道具は人が使うものである以上、人間（ことに手）とのつながりが深い。そこには「技」があり「知恵」「感性」が生かされていた。道具それ自体が人との親和を保ち、くらしに厚みと豊かさをもたらしたのではなかったか。

装置は今日の公園のような限定された遊び空間ではなく、かつては、いたる所が遊び場所となるような「空間」があった。これもまた、重層かつ立体的変化をもったものであつたらう。空間としての多様性は、勿論そこに展開されるドラマの豊かさも演出したはずである。

行商、修繕屋、露店商、そして市場、銭湯といった社交場。これら多様な装置は、生活に直結した経済行為としての「姿」、モノだけで完結することのない、人と人とを結ぶ具体的交流を保障していたし、何よりも、豊かな表情とことばがあつた。（このあたりの事情は、いわゆる発展途上国の市場に集う人々の様子を、ＴＶ画像からも窺うことができるだろう。このようなとき、いつたい先進国の「先進」とは、経済大国の「経済」とは、何と空々しく、虚しくみえることか）。

形、重さ、堅さ、色合い、匂い―そういったものを「質」と表現するとき、モノを失うとは、物体そのものと一緒に、そうした「質」をも亡くすることを意味している。

「焼きイモ」が消えるとは、その姿、味、溫柔と共に売り声も、おっさんも消えるということだ。かくして、実態（質）を離れたことばの残骸だけが浮き世に虚しく漂うことになる。

#### プラスチック・ソサイエティー

長くなったが、亡くしたものの概要は以上のようなものである。では次に、何と引き換えにこれらを置き去りにしてきたのか、という疑問につなげる必要があるだろう。と、いつても答えは明白―便利、

能率、生産性、つまりカネとモノにつながる拝金主義である。「家庭にモノがあふれても、それだけで心は豊かにならない。それどころか、時間を節約するモノを買うために、自分の時間を犠牲にし、かえって忙しくなっている」。

大量生産、大量消費をめざしたこの社会装置は「プラスチック・ソサイエティー」。邦訳は「使い捨て社会」と呼ぶ。その冷たさ、軽さはプラスチックのもつ質感であると同時に、血のかよわぬ社会をも見事に象徴している。既にご承知のように、使い捨てられるのは、プラスチック容器にとどまらない。大型ゴミを見れば一目瞭然。ハンバーガー・ショップに代表されるように、「食える」ものまで捨てる飽食社会。モノを大事にしない民は、あらゆるものを軽んじるようになった。他の生き物の命、自らの命をも。

### 有機・多様

そういえば、先頃中学生のいじめ問題に触れた閣議後の記者会見で、文相が「…各省庁の窓口が有機的に…」と語っていた。

辞書で「有機」を引いてみる―生物体のように、全体を構成している各部分が、互いに密接な統一と関連をもっている―こと。そして、有機に厚みをもたせる要件が「多様」ということだろう。韓国の古典劇には、人間と共に動物や正体不明の生き物も登場するし、我が国の伎楽面にも猿や狐、架空の天狗

や河童もある。昔話に登場する種々の動物たち、鬼や幽霊たちは、物語を色するための、ただの添え物ではなかったはず。だが今日、彼らの住む場所はない。

失ったものをマイナスとするなら、ではプラスはなかったのか、と言えば、実はあった。(ことわっておくが、ぼくはなにも、失ったものだけを挙げつらって、人間の人間たる特性である文明や進化というものを全否定しているのでもなければ、縄文時代を理想としているのでもない。自分(人間)の、生き物の一員たる自覚を根本として、それらが自分(人間)や他の生き物に幸福をもたらせるものであるかどうかを、広い視野でもって選択してゆくことが重要である、と考えているだけだ。そしてその場合、幸福とは結局のところ、生を促進させるものであって、それを阻害するものであってはならないのである)。

### 「情報」という名の空虚

ところで、プラスとは、「情報」という名のおせっかい婆さんのことだ。頼んだ覚えもないのに、文字、音声、映像に姿を借りて、これでもか、と言わんばかりに押し寄せてくる。朝刊の新聞広告に始まって、駅、車内、街頭と、どこへ逃げてでも迫ってくる。

「寄り道のない教育、すき間のない生活、都市環境のなかで主体性を失った人々は、情報化社会の中で簡単にマスメディアに翻弄される」。かくして、日替わりの「健康法」が特集され、「さらに、不

規則で多忙な毎日に追われて、食生活が不規則で偏ったものになり、その結果、健康食品や栄養剤を食べ過ぎたり飲み過ぎたりして病気になるという、奇妙な現象も目立って」きている。…もうマンガである。ただし、悲しいマンガである。ここまできると、情報などという代物の、何と有難迷惑なことか。にもかかわらず、この功罪の恐るべき魔力に気づくことなく、さらなる鎮静剤（モノ）によって、空虚の穴を埋めようとしているのではないか。

「次々と安易に送り出される一方的な情報におぼれた国民は、感覚が麻痺し、どんな重大な事件が起ころうとも無感動・無関心で、（中略）怒ることすらできず、すぐ忘れてしまふ」。何千キロも離れた所で展開される砲撃や銃撃、それによって奪われる人の命までが、ドラマと同様、コマ―シヤル入りで流れてくる。これを視ているのは、居心地のよい茶の間でせんべいを食っているあなたであつたり、ほくであつたりする。おしなべてこの調子。見たつもり、行つたつもり、聞いたつもりの疑似体験が、解つたような錯覚を生む。そして時にはTVに向かつて「馬鹿なことを…」などと批判したつもりになつて自らの良心だけを救済するのである。

実態を亡くしたことが空虚であるように、そうした情報を食らえば食らうほど、空虚感、不安感がつのる―前出の漱石のことがここでも現実味を放っている。

モノ・カネ信仰



「高度経済成長」という方向性は、公害や環境破壊に代表される社会的害悪をもたらせたばかりではなく、これまで述べてきたように、私たちの日常から、その「質」たるべき「くらし」をも奪ってしまつた。だがそれは、国家権力などという「外」からの力によつて「奪われた」というふうに捉えない方がよい。私たちの多くがその方向に舵を向けた結果であることは、一人一人の記憶に刻まれているはずである。

低迷したかに見えた景気も、このところ回復傾向にあるという。家、車、家電など、年末商戦はなかなかこの時期、広告の数もおびただしく、モノが幸福に直結するかのごとき価値感は衰えるどころか、益々の元氣印である。（「重病人に診察は不要。カンフル注射を！」、相も変わらぬ対処療法。いつまで延命できるというのだろう）。この目で見えてきたわけではないから、これとても情報によるものであるが、つい先頃まで社会主義のお手本と見られていた中国でさえもが、急速な経済路線重視の方向に傾いてきている。が、社会主義の崩壊を対岸視できる程に、資本主義は既に健全ではあり得ない。末期症状を、より強い抗ガン剤で延命をはかろうとしているだけの肥満国に、習うものがあるとしてもいうのだろうか。

### 再生に向かつて

環境、エネルギー、教育、医療―私たちが今かかえている問題は、個人の（力の及ぶ）レベルを越え

ている。あちこちで、幾つもの良心が抵抗をこころみているが、圧倒的数と力をもつ、拝金主義に価値を置く勢力の前では、虫のごとき存在でしかないように見える。だがしかし、私たちの一人一人が加担したことによって、今日の状況を生み出したのであるならば、その回復もまた、私たち一人一人の正気を使用することによって可能であることを示している。

病みたる人の治療が、対処療法にあるのではなく、その生活に原因を求めて根本治療と為るように、病みたる国を癒すには、そのありようを見直す以外に再生の道はない。

古びた格言を引っ張り出して、全体を締めくくろうと思う。「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」そして「隗より始めよ」―自分の足許を見つめ直すことから始めたい。

## 追記

「農業基本法」(昭和三六年)

…さらに、自立経済育成がゆきづまり、兼業が深化し、米の生産過剰と土地利用率の低下とをもたらした。重化学工業中心の高度経済成長の過程で、脱落した農民・農家の青年は都市の工業の労働力となり、農村では「三ちゃん農業」が一般化した。

「新産業都市建設促進法」(三七年)

「大都市における人口及び産業の過度の集中を防止し、並びに地域格差の是正を図るとともに、雇

用の安定を図るため」に制定された。

「全国総合開発計画」（三十七年）

計画では、後進性からの脱却と地域格差の是止のために、全国を過密・整備・開発の三地域に分類し、地区ごとに開発拠点を設定するという基本的政策が示された。

「新全国総合開発計画」（四十四年）

「日本列島改造論」（四十七年）

この構想にもとづいて、田中内閣は国土総合開発法の改正、国土総合開発庁の設置、国土総合開発公団の設立を実現し、一挙に列島改造の道をひらこうとした。

「国土利用計画法」（四十九年）

この法律は、田中角栄内閣が、日本列島改造論を推進するために国会に提案していた国土総合開発法案が、強い野党の抵抗をうけたことから生まれた。

「第三次全国総合開発計画」（五十二年）

計画では、これまでの生産効率第一主義を反省して生活関連社会資本や社会福祉政策を充実させる。日常生活面でひたすら物質充足を追っていたものを改め、自然条件や伝統文化を復権させ、地方都市の生活環境を見直す。地域社会における若年人口流出をくい止め逆転させるための根本対策をたてる…。

(結局のところ、これらの政策は「都市」を向いており、ゼネコンを肥やすものでしかなかったことは、今や周知の事実である)。

へ以上『昭和史辞典』昭和史研究会編より

この稿が対象とした時間空間(即ち私が生きてきた)は、右に挙げたような国策を屋台骨にして、形づくられてきたのだろう。

廻れば「地すべり」は、もっと早くから始まっていたのだが、昭和三六年の農業基本法を事の始まりと見るならば、「農産漁村をとりまく風景」はここから大きく変容していった。「開発」の魔手は「地方」をより好み、どこも同じ色に染めようとした。

橋や道路はカネ、モノ、シヨクバ、ジョーホーという「便利」を持ち込み、生活の「質」を奪った。それはまた、先んじて潤いをなくしていた都市との均質化に必然とつながっていった。コンビニ、ファーストフード店、ファミリールレストラン、カーアクセサリー店、(学習)ジユク：今や全国いたる所同じ風景、同じファッション、同じ言葉、「農的くらし」などと浮かれる危うさ。ましてや「我立ちたる処、聖域なり」とはゆめゆめ思うまじ。「心中の賤」とは、私自身に棲む怪のことであり、「隗より始めよ」と自らを戒めた所謂である。

見つめること。見つめるものと共に在らんことを願って……。

## 第二章 【奈良】 水越寛宣・塚原省一さん

### 一、産消提携運動

#### 食べもの学校とは

奈良市で唯一の産消提携グループ「奈良食べもの学校」は発足から十四年を迎える。会員数は百二十人前後。野菜を中心に、米、卵、果物、お茶を扱っている。ふだんは野菜がメインで消費者の方に野菜が届くのは週一回である。去年から、値段は季節の野菜をセットで二千円、それを基本に設定した。ワンパック方式と呼んで、戸別配送するやり方も取り入れた。食べもの学校が掲げる案内文を見てみよう。

安全な旬の野菜を食べていますか？

殺虫剤、除草剤、土壌消毒剤、化学肥料を一切使用せず、有機肥料で栽培した野菜をお届けします。「食物汚染を学ぶ会」から誕生した奈良食べもの学校。安全な食べものを食卓に、との願いで生まれた、村と町を結ぶ橋のような小さな団体です。完全無農薬、有機栽培を守り、運営を続けられたのは、消費者の願いと生産者の熱意が実った結果です。

奈良市にはこのような会はこの「奈良食べもの学校」だけです。産地直送の無農薬、低農薬野菜と

銘うった販売流通ルートは、時流にのり次々に誕生していますが、それは、物の売り買いでしかありません。消費者の思いをぶつけ、生産者の現状も共々に見合う関係は、わが国の農業や私たちの生活をとりまく状況を考えることでもあります。つまり、食べることを通じて世の中を考えることです。

この会の野菜のおいしさは、市販の野菜と食べ比べてみればわかります。野菜本来の甘味があり、味も濃厚です。豊かな土から生まれた正真正銘の無農薬で有機栽培された健康的な旬の野菜なのです。

今、しきりとダイオキシンや環境ホルモンのことが政府やマスコミで注目されています。政府が取り上げるといふことは、事態はかなり深刻です。農薬を含めた化学物質はわが国の産業の大きな柱です。暮らしよりも経済が優先されるわが国ではよほどのことがない限り危険はいつも公開されることなく封じ込められてきました。企業が利益を上げきる二十年〜三十年の間、人々に危険が知らされることはありませんでした。誰も責任を取らないこの国で、犠牲になるのはいつも普通の人たちです。

私たちの生活は自分で守るしか方法がありません。一生のうち、身体に取り込まれる有害物質は二百キログラムともいわれています。もちろん大半が排出されますが、体内に蓄積される微量の有害物質がどう人間に働くのかは未知の世界です。環境ホルモンにしても、免疫力低下にしても今後、解明されるはずですが、そしてまた、この先どんな新たな害が発生するかわかりません。

農薬、化学肥料などを用いた近代農業と呼ばれる農業による作物は見かけのよさや口あたりのよさに比べて微量元素など栄養価は低下しています。それを補うための栄養剤、ドリンク剤など大流行り

です。

「健康志向」も今や産業のひとつとなりました。

地球規模で考えると、農地の減少と人口増加と国や企業の食料操作で、食糧難はすでに進行しているのです。日本では、びっくりするほどの自給率の低さが、飽食の馬鹿騒ぎに隠されて実感できません。しかし、経済構造が変われば明日にでも私たちも食に事欠くかもしれません。それに備えるためにも、地場の農業を大切にしなければなりません。私たちの努力で少しでも有害物質が減らせるものなら力をつくそうと奈良食べもの学校は考えています。今、遺伝子組み換え食品の表示義務を国に要請することや奈良市の市議に学校給食に遺伝子組み換え食品を用いないことなど申請しています。私たちは、各会員がボランティアに近い形で会の運営や援農に取り組んでいます。

### 生産者代表

会の生産者代表は水越さんである。現在、野菜の生産者は二人で、毎週火曜日と金曜日水越さん家の作業場をステーションにして配達する。もう一人の生産者は後で詳述する塚原さん、また以前、小野さんもここで野菜作りをしていた。

「早朝から収穫するため仕分けと配達は、夕方から夜まで結構時間かかっています」

一回の配達は十品目を目指して、品揃えがある程度保たれるよう考慮し、作付をしている。価格は二



水越さん（94年）

千円。

「夏場は果菜類の単価が上がってどうしても二千円を超えることもあります」

野菜別の値段は生産者と消費者の話し合いで決まっています、それで計算する。去年までは全部野菜の単価を出して平均割りする方法をとっていた。

月一回、定例会が持たれる。消費者と生産者が集まり、会の運営について話し合ったり勉強会を行っている。グループ購入に比べ、仕分け済の野菜セットを希望、あるいは単独で戸別配送を希望する会員の割合がだんだん増えてきている。

「戸別配達を希望する人が増えているが、一方で毎月の定例会に出席する人は少ないですね。僕らもつと、こちらから話しかけなくてはと思うのですが」

新しく入った人の中には、日常生活にある「食べもの」をどう捉えているか意識したり疑問を持った部分が少ないからである。食べものの学校の方針となっている「野菜の地場生産、地場消費を实践する」ということが大きなヒントになるのは間違いない。

会の発足当初から関わった消費者代表の後藤さん。



「これをやるとね、生活全般が変わるのよ。それまである程度献立決めてね、献立に合わせて野菜を買ってたでしょう？　ところが今度は逆でね、野菜を見てね、今日何作ろうか、という形なのよ。例えば、水菜がいっぱい穫れた年なんかね、来る日も来る日も、水菜が配達されるわけよ。そうすると、水菜をどうやって食べるか、というので、料理法が生まれるしね」

と台所事情を話す。代表を中心に年一回、会としての催しを企画する。

お米の生産者は近辺の農家で十人程いて、当初からのメンバーが多い。十五年間位作ってくれている。交流会を兼ねた援農で、お米の草取りに、消費者が分担して回る。その手配をしたり注文を取ったり会員を増やしたり、会の維持のために消費者の中心メンバーも尽力する。

「みんな仕事や生活を持っていて合間合間で、ずっと縁の下の力持ちでやって来た部分がある」と水越さん。

以前、こんなことがあった。

「ずい分前のことですが、お米の生産者に対して価格差を付けようという話がでたんです。水は上から下に流れるのは当たり前ですよ。すなわち山手の水はきれいで、下流は家庭雑排出物で汚れているわけです。だから山手を高く、平地を安くという案でしたが、そのような考えではなく、川をきれいにしよう、という問題意識を持ってほしかったですね」

専門家に野菜の残留農薬について調べてもらったこともある。

「僕たちが作った野菜はたまたま農薬を使わず、自家消費野菜の延長にあるだけのことです。だから僕たちのスタンスとしては、なんぼでも聞いてもらったら、なんぼでも答えます、というのはあるんですよ。野菜自体にあんまり意味を持たせるつもりはないしね」

水越さんがずっと大切にしてきた部分だ。

「だから、通信とか書いたものも大切だけれど、自分たちで配達出来る範囲で直接行って顔を合わせることを大事にしたいと思っていますわけです」

### 引き売りの頃

実は水越さんも農大出身である。しかし在学中は、彼が竹村さんや小野さんと知り合う機会はなかった。同期だったが、水越さんは新聞部の所属。

「有機農業てのは自分を見出せる、という、センサーショナルでした」

卒業して間もなくバンブービレッジを訪ねて行くことになる。

「彼らが、たまたま農業新聞の取材を受け、その記事を見て手紙書いたら返事が来て交流が始まったわけです」

その時水越さんは、自分の作った野菜を引き売りしていた。販路を開拓すべく、駅前などで曜日を決めては飛び回っていた。

駅前で、食べ物学校初代の消費者代表と出会った。「食物汚染を学ぶ会」という勉強会に、水越さんが講師として行った。

「ここに来ていた人たちに、僕が紹介されて、産消提携団体を作る動きへと、どんどん出会いが広がった」  
就農二年目に地元で生産者の仲間も出来た。

「その人に初め出会った時なんかもう『そんな、アホな、やめとき』て言われてたんですよ。それをどうにか口説き落としましたんです」

「当時は大根一本でも持って行ったし、どんな大根でも食べろ、みたいな勢いでした。今でも言われるけど、あの頃は虫食いでどうしようもなかった、と。それにグループ会員以外は受け付けてなかったんですよ。個人で言われたらそこは断りました、強気やったな」

その後会員数は徐々に増えて百二十人位になった。大きいグループは二十人位、だいたい四、五人のグループだった。グループ数にして二十五位。

## 二、経営を考へる

### 家族経営

水越家は代々の専業農家である。農家出身のこだわりが、水越さんの原点になっている。

「家を継ぐというの嫌で、なんで俺が継がなくてはいけないのか、みたいな。農業はやりたい気持ちは

あって、それで大学行ったんです。そこで三里塚の空港反対同盟の農家と出会い、有機農業というのは自分を見出せることを知り、感動しました」

現在の彼の家族構成は両親と祖母、妻、子供の計七人家族だ。

仕事もお互い手助けし合って進む。家族で役割分担しながらの作業。年間四十〜五十品目を作付する。野菜と米が同じ位の経営面積である。

「今年水田を七反程やっただけです。この五、六年は、草が段々と増えて、もう去年も今年も七月、八月はほとんど草取り。まあ完璧に取るのは不可能なんだけど、それだけの田んぼの広さがあると、ある程度減らさないと野菜の方も疎かになるわけですからね。でもはじめの頃は、そんなに草は多くなかったんです。田んぼにはまだ草は少なかった。無農薬に切り替えて、初めてカブトエビが発生するようになり、草がほとんど生えない。だから十年位、無農薬の米作りって楽だ、と思ってたんです。カブトエビが少ない水田には、持って行ってたくさん増やしたりしました」

「田畑輪作すると、特にダイコンサルハムシなどの虫も少なくて済む。連作すると秋作からのダイコンサルハムシが特に増え、白菜やら大根が小さい段階で全滅してしまふ。小野くんが開発したハンドクリナーで取っている。あの虫に関しては、みんな難儀してると思います。一般的に言えることは、輪作すると、それなりにいるけども大量には発生しない。その他にも白菜にいるヨトウ虫などはピンセットで三回位取るんです」

「で、輪作するとね、お米にもいい。お米は充分穫れます」

野菜の出荷で過不足を融通し合うこともある。

「それは何回か、向こうが余ったり、こつちが逆に無い、という感じでもらったりもしてます」  
でも両親の年齢を考えると、代替わりを考えていかなくはない所に来ている。

「親父さんたちも参加してもらいながら何か楽しいことやりたいな」

## 農家出身

生産者も増えた。小野さんが入りしばらくしてから塚原さんが加わる。

「会がこういうパターンに落ち着くところに来るまで、立ち上げる時色々結構大変だったんですよ」

会の分裂の危機もあった。生産者同士の間でも、消費者同士の間でも意見が違えばそれぞれのやり方も違ってくる。

「消費者代表が替わる時が大きかったですね。あと生産者の共同経営がうまくいかず別々にすることに  
なったり。生産者が増えて個人の個性を生かせず、消費者との関係が希薄になってしまったと感じた時に  
は、別々の会に別れよう、という話はよくしていました」

数年前に農協の役員もつとめた。

「色々な研修があるけど、出て来る人はみんな近代農業の事例ばかりで、全国組織での農協の青年部にな

ると、だから僕らみたいな考えの人間が前に出てしゃべる機会はありませんね。つまり、構成員のほとんどはサラリーマン並みの八桁位の農家になりたがってるわけです」

人が集まらなくて空回りの状態だったので、とうとう去年青年部も休部という形になった。

### 新たな試み

去年は新たな試みがあった。脱サラ農家の友人と先生と三人で、だいたい月一回のペースで企画を練った。この一年の企画として小学校のひとクラスで社会の授業の一環に、米作りをやった。田植えをはじめ、田んぼの作業にも子供たちが参加して、秋の餅つき大会は八十人程集まった。

「子供たちはすぐ喜んでましたよ。おじいちゃんおばあちゃんも親子で、楽しかったです。ゲームですごく盛り上がり、優勝した人は大きい焼き芋で喜んでいました。今やどこでも行われているようで目新しくもない試みでしたが、私には新鮮でした。これまでは経済行為としての位置付けしかしていなかったことが、本来のあるべき姿（形）に少し触れることが出来たように思えます」

食べもの学校のこの間の収穫祭は、水越さんの所の近くの田んぼで行われた。例年より少し大人も子供も少なめだったけれどみんな予定さえ合えば顔を出す。これからまた有機農業運動を含め水越さんの力がさらに発揮されるのだろう。

### 三、奈良の消費者

食べもの学校を支え、水越さんたちと共に会を築き上げて来た後藤さんに取材をさせて頂く機会を得た。食べものを通して人と人を繋ぐことに十三年間ずっと力を注いできた。後藤さんが今一番注目しているのは、小さい子供を持つ若いお母さんたちだ。会の中で若い世代を育てることがテーマになってきている。それというのも、食べもの学校で戸別配送に踏み切ったのがきっかけだった。新しい会員さんとして二十人位どっと増えた。求めていたものが見つかったという人たちだろう。会のイベントの企画を任せれば、驚くほどのパワーを発揮した。積極的に計画の段階から、中心になって動いてくれる。食べもの学校の内外で何かが変わってきたのを感じている。

後藤さんたちは当初から共同購入を基本とし、生産者から野菜等をもらうという消費者の立場を保ってきた。事務所や専従のない会の運営は、消費者も必然的に関わらざるを得ない。会員の中で「お茶係」「お米係」等決めて、援農や供給のやり繰りのため生産者と関わっていく。お茶は、三重県月ヶ瀬村にある茶畑に毎年出かける。十何年前には小さかったお茶の木が今は通路が狭く感じる程大きく育って、それを見るにつけ愛着が湧いてとてもじゃないけど手放せない、と後藤さんの言葉にも力がこもる。生産物の価格も、消費者の手に届くまでの工程を、消費者自身に関わることで抑えようというやり方だ。会員みんなが思い入れだけではなく育てることを共有している感覚がある。

十年余の間は野菜が質量共にあまりできなかったと後藤さんは言う。拡大販売をして会員を増やすためには野菜の供給が安定することが望まれる。水越さんを軸に、塚原さんが加わって去年位から量がほぼ安定してきた。野菜作りに研究熱心な生産者には頭が下がる思いだが、世代交代を考慮しても生産物に責任が持てる訳ではない側面を見据えている。現に、お米の生産者だった人がもう作ることができなくなって農協の職員になったり、春の楽しみのひとつだった苺も、作る人が居なくなればそれで終わりという状況が見えてきた。生産の面でも何とか継承できる形が取ればと展望する。

始めた頃は、消費者同士の連帯感もあり運動の気運が高かったし、生産者と生産物、畑に深く関わることで何ものにも代え難いものを得たという自負はあるけれど、今では有機農産物の経済的な付加価値がもてはやされ、その流通が氾濫し、消費者はそれに安心してしまう状況が広まっているだけで、本当の意味で有機農業運動が広がったとはとても思えない。生産者も、会に出荷する田んぼにだけは農薬をかけないという人等、付加価値に注目するだけでは気が滅入る。環境問題全てを頭に入れた人が増えればと願う。そうして会の在り方が変革してきているところを、後藤さんはきっちり見守っていく。共同購入というのに抵抗がある若い人たち、少し閉鎖的な感覚、完璧に徹底しようとするといった世代的に理解しにくい部分にも目を向けてこれからはもっとまちの中で多様な交流を広げていきたいという思いだ。

#### 四、気に入った圃場



## 新規就農第一号

塚原さんは、奈良県が窓口になって農地を斡旋した第一号である。奈良県山辺郡都祁村。まだ東京に「新規就農ガイドセンター」が出来たばかりの頃だった。窓口といっても名前だけで機能していないようなものだった。

「ちょうど探し出した時期に知ってね、あちこち府県に連絡入れたんだけど結局あんまり動きが活発じゃなかった」

各県の中に農業会議というのがあってそこが窓口。塚原さんはそれが『土と健康』という雑誌に書いてあるのを見た。

「これは聞いてみないかん、てことでね。奈良県だけが動いてくれた」

就農して九年目に、新規就農のセミナーのパネラーとして呼ばれた。新規就農ガイドセンターが主催して、東京と大阪で年一回行われる。

「希望者てのが六百人位来てるんだよね。そこに、求人ブースがたくさん会場に特設してあってね、要するに、農業法人とか、新規就農でまだ直接独立すん人にはすぐには出来ないけども体験だけしてみたい、という人がするように。それが、すごい多かった。時代の流れやな、とつくづく思ってた。我々が始めた十年前は、そんな全然何にもなかったからね」

各県がスポンサーになっている深夜のテレビCMでメッセージを求められた。新規就農者が県の顔にな

ることに驚いている。

十年前に入植してから、農地のトラブルとずっと向かい合わせの日々。未耕作地の山土を今の畑土にするまで、苦労話には事欠かない。

「最初見に来たんやけど、草もほとんど生えてなくてね、石ばっかりが見えててん。未耕作地というかね、やせてる所だね。ある部分は、うわーって茅が生えとったりして、石多いなあ、て言ってるね」

三方が山で、下に家もなく農地の一番上からの見晴らしが良い。

「この場所がすごく気に入ってしまったからね。流れて来る水が、飲むような水でしょ。無農薬でやるのに、こういう所だったら苦情も出にくいでしょ。虫のこととかね。鶏飼うにしても、民家とも離れてるから。石なんかね、とにかく目に入らない、みたいな」

一年目の冬、一日に一個か二個しか石が取り除けなかった。地中にはかてかい岩ばかり埋まっていたのだ。拾えば済むなどと思っていたがとんでもなかった。

「最初一番下の段の所から始めてね、その辺からずっと山を削ったような所だね、石もそんな、握りこぶし位の感じでね、楽だったのよ。あ、いけるいける、てな感じでね。ところがだんだん進んでってね、二段目に入ったら石だらけだね」

「要するに、石の頭が表面にちょこんと出てるからね、小さい石だと思ってるわけ。それがさ、どんどん掘ってつちやって。で取るところ取るところ、みんなそれでね」

五メートル程、だいたいハウスの幅を掘り進むのに一ヶ月かかってしまった。夏場は作物を育てるため時間が取れない。冬場に入りじっくりやろう、ということ、やったら五メートルしか進まない。

「これじゃ、何年もかかってしまうな、と思つて。で、どうしようもなくなつて」

前々から、その話は役所の方にはしていた。

「新しい畑は石があるの当たり前」

役所にそう言われた。しばらくはほとんど相手にしてもらえなかつたという。彼は五メートルの間に掘つた、岩のような石をゴロゴロと三十個位畦にびつしり並べて、もう一度役所に出向いた。

「今後これをどういう風に進めて行つたらいいか教えてくれ、てね」

やつとのこと、で大きい石は取り除いてくれた。塚原さんの所は国営のパイロット事業で開かれた所だったため県の方にはどんな状態であるのか関知されていなかったのだ。そして重機が入つて石を出していった。

「それでその二年目の前半はだいたい時間取られたんやね。結局やつてもやつても石の山が出来るだけだね。細かい石の量がすごいわけよ。これはしようがない、てことで客土してろうて」

それが二年目秋。四トンダンプで四百台位。ところが、客土した土がドロドロの粘土だった。

「田んぼの土を入れたのよ。そしたら『その土、石ないぞ』て言われて、石がないならどんな土でもええなあ、と思つただけ。いい土だ、と聞いてたの。それが、真っ黒いトロトロの土。雨の日はズルズル。トラクターが沈んじゃうような。乾いたらカチカチ。夏の日なんかは」

でも時間がなかった。作物を作らないと。その土壌には、やり方としては堆肥を入れて粘りを取るといふことだった。牛糞をどんどん入れたが、なかなかだった。

「どうにもならんな、て思いしてる時に、今度あすこの山がね、崩れかかったんや」

三年目にして、裏山が崩れてまた大工事。その時出た土を客土に使った。土や堆肥を混ぜる作業に五、六年を費やす。

「時間が経つ、てのはどういふことかというのと、うちの場合家族多いでしょ。生活費が重い。その間に軍資金使ってしまった、という」

行政による奨励金の類は、制度の後追いで全く利用出来なかった。

## 都会の生活

「自然食品の会社に居たから有機農業への憧れがあったし、子供たちに都会ではない生活を経験させたかった」

大阪で二ヶ月程、研修に通った。それまで農業技術を学んだ経験はなかった。

「それまで住んでたとこのわりと近くに行かせてもらって、でも草引きやった位で、昼飯食べながら色々話聞かせてもらって、だいたいこんなんでいけるな、て考えてたんやけど」

正食協会の雑誌などの情報で講演を聞いて、有機農業研究会を知る。仕事をしながら、無農薬でやって

いける話を聞いたりして、有機農業をやりたいという思いが確かなものになる。そして動き出した。その時、塚原さん三十八才、五人兄妹の一番上の子が小学校五年だったという。

「すぐ下に四年、二年、幼稚園。すんなり入れる、ぎりぎりの年令だったかな」

翌年、小学校へ塚原さん家の子供が四人通った。地元では前代未聞。

「小学校がね、人数少なくて、結局、校長先生が小学生欲しいから『とにかくここへ来い』でことで住まいを決めたんやけど、結果的にはポロ家だね。農地探してる時、ここにめぼしをつけてね、住まいは、別のところにいい話があつたんやけどね。先生が『畑に近いし、いいやんか』でことで、その場で。してやられた、て感じで」

最初はずっとひとり仕事だった。奥さんが手伝いをしながらの作業。

「ちよつと強引に家族を連れて来た面があんねんけど、僕の体を感じるものを子供たちにも通過させておきたい、ていうのがだいぶあつたね。嫌になったら出てけばいいし。上の二人が早くここから離れよう、という感じ」

家族が広々と暮らせる住空間が理想だった。

「都会で五人の子供住まわせて食べさせて、ていうのがね、辞める前はそこそこ給料があつて何とかいけてたけど、家のローンとかね、支払いが大変なんだ。その頃疑問持ってたのが、なんで日本、経済的に豊かなはずなのに、子供五人て僕自身がまず出会ってないし、子供二、三人で普通に働いて家を持って大変

だとしたら、まず平均的なサラリーマンでは大変なこと。僕、狭い所で、きゆうきゆうとしたの嫌いやしちよつと広い所で、て思うしね。辞める決心してみるとよくわかるんやね。田舎のボロ家だったら、都会の家とね、十万違つちやう。十万儲けたようなもん。家族の住空間にお金がかかるからね。田舎の方が楽なのよ」

都祁村に来る前は兵庫の山奥に近い、町に通えるぎりぎりの所を住まいに選んだ。辞めようという転機がなかったら今のようにはなつてなかった、と塚原さん。

塚原さんの思う田舎の風景とは。

「我々の年代はこういう原風景に郷愁があるしね。原体験、てゆうか、懐かしさ。都会で生活していると、なくなつて、二度と経験できないもの」

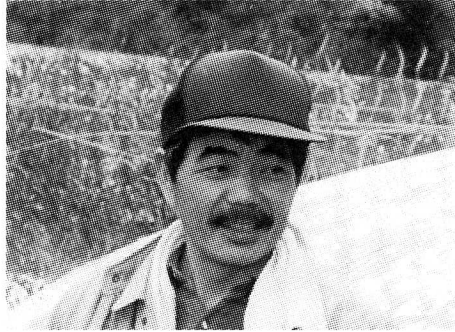
## 五、ちようど十年

### 会社を辞めて

仕事を辞める決心をしたら、有機農業以外の道は考えつかなかった。

「社員というより経営者の一角みたいなポジション、意識の上では。どっちかっていうと仕事人間。無我夢中でやって来た。つまらんな、ていう嫌気さしてた。有機農業、やっぱりこれだな、ていう」

初めは販売ルートも何もなかった。食べもの学校の少し前に出来た会が榛原にあつてそこを訪ねた。



塚原さん (95年)

「仲間なし。全くなし。情報なし。東京の友たちに送ったりしてた。食べもの学校に出会ってからはそっちメインに出して、それと大阪の自然食品卸、有機の八百屋っていう」

今から思えば、就農したきっかけは色々なことが絡んでいて、家族という荷物があつたからゆっくりしてられなかった、と話す。

「ひとつの要因というよりも、自然食品業界にいたこと、仕事上のこと、家族のこと。農業をしよう、て決めてからは、ここへ来るまで、すーっと流れて。ここしかない、て思った」

生まれは千葉県野田市。若い時はサラリーマンというより起業家のような、自分で会社を作り上げていくタイプだった。当時の生活から

は今が想像できないという。

「ちよつとした企業に履歴書出して就職というのは経験ないのよ。どっちかっていうと自分で仕事を作っていたり仲間と会社作ったり、学生時分からそんな感じ。現実的な所がおもしろくて、二十代は突進しとつた。そういう反省から今があるようなもんですわ」

この十年は本当にあつという間に過ぎた。作物が猪にやられたり台風で出来なかつたり。

「まず失敗しながら失敗しながら。自分なりにそこそこ出来るようになってきた。たぶん出来るやろうと

いう自信があったからここまで来たんやけど、途中では随分めげそうになった時もあるよ。『思い』があつてね、三年間位は続くんやね。集中して夢中で出来た。それからトラブルも続くしね。一時は自暴自棄みたいだね」

子供五人分の教育費がどうしてもかかって来て大変だ。

「普通は五反位が、一人でやる広さなんだと思う。ちよつと無理をしないとダメなんだよね。子供が大学行く、とか、どこまで行ってもいたちごっこ。ちよつと誤算かな」

あともう数年頑張つて、その時にもしろい農業を展開したいと切望する。

### 研修生と共に

頑丈な鶏舎が出来つつあつた。卵の出荷が始まっていた。作業小屋もだいぶ広くなり、研修生の住み込みの出来る家も完成してきた。最初はもちろん、この家もなくて研修生が来るようになって建て始めた。家のある段はこう配が急だったが山崩れの土などを乗せて水平に整えた。

「こういうの建てたのも、一人では広げるの難しいから、助けてもらわないといかんから、まだしっかり分担してるわけじゃないけど仲間が居たからこそここまで出来た。一人じゃとっても出来ない」

初め借りた広さは七反半で、去年から一町六反に増やした。ハウスは六棟目を建てている。野菜を周年体制で出荷出来るように経営を考えた。入れ替わり立ち替わりにでも誰か居るようにして人手を確保した



いと考える。

「ここに一人は住み込んで。もう一人は寮みたいな所に住んで自転車を通ってる。この前の新規就農セミナーに来てた人が加わって。その人は、来年には独立してやりたい、という人」

四十代の人が多い。

塚原さんの野菜の出荷先は、食べ物学校をメインにして、大阪の自然食品店へと販路を広げつつある。

「店の方がね、うちの農園がやっぱ一番いい、てことでだいぶ力入れてくれて、畑まで取りに来てくれて、それもうまく行くと思う。思った程まだ充分には出荷してないんやけどね、まこれから」

研修生だけでなく消費者も遊びに来てくれたら嬉しく思う。特に若いお母さんがもっと会に集まるようなやり方をしたい。

「みんな気持ち良く来てくれてね、喜んで来てもらってね、ついでに草の一本でも引いてくれてね、帰りに野菜でも、てね。消費者も、無農薬で本当にみんな信頼してくれてるのかな、というのがいつもあつてね。頭か上げてるより、逆に畑に見に来てもらってこっちも安心するし、食べてもらう人も野菜だけ見ると違うし。この場所は、もっとそういう可能性のある所と思うよ」

消費者や研修生の有志で畑で遊べる企画を立てて楽しんだ。ゆくゆくは畑の近くでファーマーズショップを展望している。

## 第四章 【香川】 小野裕次さん

奥山から

今、小野さんは香川にいる。高松市から一時間弱の木田郡三木町へ三年前移り住んだ。周辺からの注目度は高い。



小野さん (94年)

「まわりの人は誰一人安心して見てないと思うよ。またどっか行くやろう、とか」

一般の農家に、無農薬の野菜なら高い値段で売れるかと思われるが現実にはそうではないし、自分の捉えている「無農薬」「有機栽培」とかなりのズレがあるように感じている。

「ほんまは現場の人を大事にしたいんよ。近所のおばあちゃん、一生懸命作ってはるけど毎作農薬がきつい葉になつていくんよ。効かんのよ」  
百姓という現場にいたら作る側の立場から搾取される側に敢えて自分が立つて初めて意見が言えると考ええる。小野さんが一番大事にしたい部分だ。

「頭の中だけで思つて口に出す評論家には僕はなりたくないな、ていうのがいつもあつて、苦しくても僕はいつも現場に立つて話をしたい。そのためには自分のやり方を追求して、自分でちゃんと食べる物は作れるよ、それなりにお金にもなるよ、という世界を作りたいね」

ちようど三年前安定して耕せる土地を求めた。行政を通して何方所かめぼしをつけ、四国に農地を紹介してもらう。

「農地は向こうから提示されるわけ。空いてる田んぼ、畑しか使えないから地元で農業委員さん通して、ここなら使えるよ、て」

行政から提示されたのは三方所。小野さんは紹介された全ての所を借りることにした。面積の合計は五反五畝。

「広さとして、まあそんなもんやろなと。手が回らんやろな、と思つた。畦が多くて、形がばらばらの所だから、まず手がつかんやろな、ていうことはわかつてたけど、とりあえず借りてやろう、と思つて、で借りたんやけどね」

農地の値段は地域によつて単価が決められていた。田一反当たりいくら、畑一反当たりいくら。行政の方で一般基準という、だいたい相場があつて最低基準位で決定してもらつたという。

「もし個人交渉やつたら、例えば日当たりのいい所やつたら、ふっかけられても仕方ない。下手したら、すごい条件のいい所を早々に返してくれ、て言われるかもしれない」

借りた土地の一カ所は、山を開いた所だった。

「あの畑、ガチガチでどうしようもなかったけどね。草は生えてたけど雨が降ったらグチャグチャ、乾いたらガチンガチンで、でもそれなりにあそこまでなるんやな」

### 販路を開拓

小野さんの作った野菜を食べる人、今も募集中だ。香川に入った時から販路を増やすことにもかなり力を入れた。大変なのは予想がついていた。

「初めっから野菜がない時から売り込んだから。早々に。来たのが冬、一月だったでしょ。野菜も何にもないじゃない、雪だし。とりあえず情報集めて自然食品店とか有機農産物扱ってるとこ決めて連絡して、冬のうちにかけずり回って、色んな話して。『奈良から来て、こうこうこうで、野菜作りしますので野菜が出来たら買うてください』て」

「チロリン村」への出荷は宅配向けと店出しとをしている。お客さんから注文を受けて会社の方から連絡が入ると毎週数を合わせて出荷する。自然食品店は二店へ出荷。そのうちのひとつ、「どんぐりや」で店頭にて朝市を催している。朝市は、売る、というより定期的に提携できるつながりが作っていったら理想的だ。

「やっぱり色んな話聞くと、香川というところは情報が溢れてるようであまり流れてない、という流れに

くい。集めようと思ったら集められるけど、朝市でもそうだけど情報を流し続けたら結構『え、そうなの』っていう人が潜在的にいて、食の安全とかいうことを思ってる若いお母さんとかそういう人が結構来るのかな、と。多分だから情報の量というより質かな、的確な情報が出されてない、というか。で、自ら望んで情報を得ようとする努力も控えめ。だから敢えてこっちから押し売りのな情報提供をする位の方がちょうどええかな、という」

機械好きの小野さんは最近パソコンからも情報を得ることが多くなった。子育てネットワークが旗揚げしたことなども知り近場の活動を把握して積極的な関わりを求めめる方針だ。

「この近くでも色んな活動がされてるし、それに結構人が集まって情報の発信もしてるし、だから結構興味があるんやけどどうしていいかわからない、という。考えてはいるんやけど行動するための指針みたいなのがね、あったら動く人は結構いるかな、と思ってるね」

一年位前に農薬について情報を集めじつくり考えてみたことがあった。隣の共同作業場で、農協出荷の野菜が売られていくのを見て改めて農薬のことを調べてみる気になった。

「出された情報を個々がどう判断するか、ていうのが重要だと思う。最終的に自分の判断で行動するけど情報に振り回される、というか責任を回避しやすい道具ではある。パソコンも。それから、農薬名の表示が現場で使用している商品名と違ったりしてわかりにくい」

近所の人から農薬について聞かれても、調べてあげたいけれど情報が得にくいというのが現状だ。

変遷を重ねて

「二十一まで東京にいて、だんだん西に流れて来たんやけど。単純で言うと、安定志向がないかな。不安定を楽しんでるわけじゃないけど、そういう部分が原点かな」

一九五九年生まれ。小さい頃はお父さんが仕事で家にほとんどいなかった。電気関係の技師という職は当時出張が多く何ヶ月も家を空けていた。小野さんが農大に進むにあたってお父さんと大分価値観の違いがあった。

「親父は仕事人間、会社人間やったから、なんで農大なんや、てまず疑問。で、入ったまではいいけど今度百姓したいなんて言うたら、親父にしたら話にならんわけ。親父の中で農業なんてのは頭の片隅にもない」  
農大を出ても就職する人の方が圧倒的に多かった。

「側に、竹村とか仲間がいて、あれがなかったらかなりきつかったなーと思うけど、反対されながらも一つの価値観として認め合うという所があった」

竹村さんと、時期や場所は違ったが西日本の有機農業実践農家を回り住み込みをした。小野さんは渥美半島へ。

「あの頃は有機農業の言葉自体がまだまだそんな知名度みたいなのがなかったから、そういう農法でやってる農家探しの方が大変だった。みんな『そんなことは、やめとき』てさんざん言われたよ。でも、僕等

はやりたくて住み込みもしたけど、有機農業は、脱サラ農家じゃなくて地元の根づいた人が地域の中でほつり、周りとは違う農業を始める、ということ、すごい勇気が要る。それと、無農薬なんて出来るわけない、という固定観念でガチガチに攻められるから精神的苦痛に耐えなあかんわけや。それはものすごい言葉に表現できない程あると思う」

農大時代からの農村調査や農家実習が、小野さんの現場に立ち現場で語る姿勢となつて現れるのだから。以来それを基本として野菜、有機農産物に関わってきた。滋賀の畑の開墾生活から抜けた後、アジア放浪の旅を経て大阪の産直グループへ専従として雇われる。消費者に配送したり農家に野菜の仕入れに行ったりする仕事だった。

「堺におつた時は給料が出るしちよつとガソリン代みたいなボーナスもらつて定期的に収入があつたしそんな不自由するわけじゃなくて、ただその会の関わり方で、百姓の立場に立つてしまうと仕事自体がほんまに百姓の立場に立つてない仕事の方が圧倒的に多いんよ。それを言葉に出してしまうと組織論になつて、それは追求できない状況があつて、そういうジレンマの中で仕事しながら『いつまでもこんなことしてたらあかん』て」

水越さんの紹介で奈良に耕す土地を求めるがその前に自然食品店で働くことになる。時間的体力的にかなりハードな仕事だった。朝は五時から夜遅くまで店の切り盛りと引き売り。

「毎週軽トラに野菜を乗つけて引き売りに行つてた。車停めてやるのが十カ所位。僕がそれ任されてどん

どん売上伸びたんよ。引き売りはお客さんと話しながら、今日はあれがおいしいよ、とかそれなりに結構おもしろかったんや。それなりに給料も上がってくるし売上も上がってくるし経済的には安定してしまふ。そしたらね、おもしろくない。お金確実に増えてくるんや。お金の世界になると、僕の中では危機感を感じるんよ。僕はお金に負けてしまふ、と自分をわかってるんよ。お金は欲しいんやけど」

奈良での五年間の百姓暮らしでも、まず三年は成り立たなかった。奈良で借りた土地は広さ約三反歩。本格的に自分でやるというのはその時からだった。

「基本的な技術はなかったからね。四年目からそれなりにね、この時期にこの種蒔いて、ああいう仕事したら、これだけでなんぼになる、と計算できるようになる。そうするとね、もう全然おもしろくない」

食べものの学校の仲間が周りにいて技術の面でも機械のことでも助かったという。香川に移る頃にはめきめきといい野菜が出来るようになっていた。

「十のものを十収穫しようと思えば農薬も化学肥料も使わないと作りにくいものもあるけれど作付全般で六、七割位の収穫のつもりでやれば、それらを使用しなくてもほどほどには出来る」

今度は香川でも四年目に入る。手応えは感じている。

「このまま年々再々してつたら少しずつ作り方も上手になるし要領も得てくると、出来る量もだんだん増えてくるし、きっちりとはいかへんけども、それなりに出来てくる状況が見えてくるとね、もう作ることはおもしろくない」



## 自然体になる

「環境によって人は変わるね。成長するというか経験を積んで変化する部分がすごく多い」

一カ所に留まることなく現場に身体を授けて来た小野さんにとって、変化した部分とは。

「竹村と、百姓やろうや、て言ってた頃は初めは安全性とか、そういうのにこだわったりして、実際これを実践してる農家を訪ねたりしたけども、自分がやってくうちにだんだんそうすることが自然体になってくる。ある程度、そういう思いの塊があつて、年を経ることに、いらん部分を剥ぎ落としていって芯の部分はあるんやけど、そこから別なものが付いてきた部分もある。その部分の方が多いかもしれん」

もちろん自分という変わりようのないものがあつて、自分の志向があつて、言ってみれば、探検部の雰囲気をもそのまま引きずつて来たようなものだ、と小野さんは言う。

「まずは自分でやってみよう、というのが初めにあつて来てる。思想的には、本からは『わら一本の革命』とか『沈黙の春』とか『複合汚染』、あの辺が核にはなってるんやけども、ああいう思いがあつて、いざ自分がやってみて色んな現実を見ながらやっていく中で、動いていく中では『これではあかん』て捨てる部分は捨てて、食の安全とか、それに近い感覚で百姓めざしてたけども、農業そのものが食物を生産する、という意味だけじゃなくて、人間という一つの動物として、生きていくための職業だ、という風な。それをお金にかえる、という意味じゃなくて、自らの食べものを自ら生産する、生産して生きてい

く、という感じの」

「種を蒔いて水やって育てて収穫して食べて、ということ自体が一つの人間としての生活の一部、生活サイクルになって、そんな感じになってきて、実際やっていることは、農業も使わんし有機肥料を使ってやってるんやけど、形としては文章としては、『有機』『無農薬』になるけど、それは後からついてくる位のもので、根本的には生活の中でそういうことがあるんや、ていう」

始めた頃は時代背景の中、風穴を空けるみたいで敢えてやりがいがあった。もし今の時代に始めるなら同じ有機農業やるにしても海外でやる、などひと味もふた味も違った輝きを求める。とにかく思い立ったら頭が熱くなって身体が動いてしまう。

### 土地を求める

かれこれ十七年関わってきた中でやはり一番難しいのはいかに安定した土地を得るかだった。奈良で借りていた所は一年契約で、継続は出来るけれど不安定だった。五年間食べもの学校の生産者としてやって来て生産者仲間共同経営する企画も出たが、小野さんは新しい展開を決断した。

「これから先見て、自分の体力も年令も含めて、とりあえず基盤というかね、百姓で基盤を作りたいと思ってるから、それが奈良の近郊で、いつ返さなあかん、と言われる状況の中で精神的に満足できひんから、きっちりした土地でやりたいと」

農業経験はある。形としては「新規就農」のための土地探し。そして販路も自分で見つけることを決意した。

「奈良でやってたら食べもの学校という会を通して作ったものがすぐ目の前で渡せる、ええ関係なんだけども、遠くに行ったらそれもままならないやろし、多分かなりしんどいやろうと思うんやけども、ま自分のやりたいこと通したいから」

土地を決めるといっても、電話で済むような話ではなかった。四国の行政が割と感触が良かった。農地がどんな場所なのか、奈良での作付はどうするか、判断する必要があった。

「具体的な場所を僕が見たい、て言ってたんで、場所を見ない限りどこがいいとか決められないから場所を見て気に入ったところでしようと思て。とりあえずは見て感触つかんで、いけそうかなあというの見てほしいんで。百姓続けてると、ずっと続いてしまうし、種蒔いて管理して収穫して続いてしまうから、その状況ではまとめて動けないから、作付はちよつと一段落させて、で場所が決まったとしてもそれまでつなぎでアルバイトみたいなものする形で生活費は稼いで、で動ける時になったらパツと動こうと」

小野さんらしい動き。

「僕は寒いのが苦手な方がいけどとにかく安定した土地がある所でしようと思てるんでそれは結果でね。販路は大変だろうけどあんまり考えてへんとかね。まあ何とかなるやろう、みたいな、僕はいつもそのパターンで来てるんで」

## 百姓で基盤を

「僕は不器用なんよ。それを自分でわかっているから、敢えてそれ以上しようと思わない」

アルバイトをしながら生活費を作ることもあったが、百姓を基盤にする姿勢を崩すことはなかった。小野さん、という個人のパーソナリティーに惹かれて関わっている人たちがほとんどだ。

「例えば、お金のために早蒔きの大根でもやって高く売れることは出来るけど、その時はいいけどその分無理して身体壊すし、そのために必死になつてる百姓の姿てのはやっぱり魅力を感じないよね。一生懸命やる努力てのが、つながってるのはもうお金だけやからね。お金を目の前にぶら下げられて、それに一生懸命しがみついている、そんな姿しか見えないからね。ほんまは百姓ていうのは、もつと自由な発想で、お金という価値観だけにこだわらずに自然の中に一部として生きてる姿が本来の百姓ちゃうかな」

野菜の付加価値という時代は終わっていると云っている。

「今どこでも有機農産物が色んな所で売つてて、誰が作つても変わらへんのや、と思う。同じキャベツでも小松菜でもブロッコリでも種はいっしょやし、そんなに変わったものはないんやと。あとはその野菜を通して、それを作ってる人間がどんな人間や、と。で変な人間やけど、野菜、虫食いのどうしようもないけど、あの人を作った野菜やったら、アクが強そうだな、ちよつと食べてみよかな、ていう気になつたりとか。野菜がなかったらなかったで、あの人のお話こうか、とか」

それは、しんどい部分でもあるが楽しさでもある。何をしても全て自分に返ってくるのが辛くもあり、逆に自分の力が試されて楽しいこともある、と話す。

特にチベットを旅してから思うことが多い。旅先で人々の生きざまや気持ちの余裕に考えさせられた。「色んな儀式があつたりして、その家族の悲しみはあるんやけど、それすらも超越してしまうような事象、物事を見て来たから。死、ということに対しても恐怖感とか全然ない。僕は反抗心が強い方で、人には支配されたくない、という部分があるんやけど、自然の摂理には素直に従いたい。日々色んなことがあるけど、自然の中では一つの現象にしか過ぎない。たいしたことない行為をしてるんや、という域の自分を見ていたい」

## 第五章 農業をすること

### 土地探し

小野さんの土地探しの頃、奈良での集まり。

水越さん「もう奈良で小野くんもやって来たんだけど、新たに自分で展開を考えてるわけですよ。それが四国か奈良になるかわからへんけどもこれからまた新たなパターンとしてね、場所見つけたいと。でもう動き出して」

塚原さん「百姓にとって農地を変える、ちゅうのは大変な決断が要ると。てのは大変やからね。自分たちの気に入った農地にするの」

水越さん「かれこれ十年以上農業を志してね、まあ具体的な出会いは四、五年一緒にやってたんやけども、まあ要するにじっくりこないと」

小野さん「百姓をパターン化すると、元々の百姓か、脱サラして農地をどっか探してそこで一から始める、っていう人と、まあ二通りやろ」

水越さん「農業をしたいと思って、有機農業てのをやりたいと思ったからやってるわけで、後継だからやってるわけではない」

塚原さん「ま意識の上ではそうんだけど、我々と決定的に違うのは、元々先祖伝来の農地と農家と農機具、ノウハウ持ってやるのと、私みたいに全く農業経験なし、知識も技術も何もなくやるのと違う」  
水越さん「やろうとしているのは行政が中に入って貸してもらおう、という。だから行政が認めるわけ。それで土地は『すぐ返せ』てならないから、小野くんが自分で土地を買うわけじゃなくて農業を続けられるような土地を探してる」

小野さん「今までは個人的に借りてた。で今度は農地取得も頭の中入れながらしたいんでね。最低五反以上を耕作しないと無理やと。だからちよつと広げて、広い土地を、かたまつた土地がええなあ、と思って当たり出して、奈良県内と、新規就農ガイドラインと農業委員会が始めた所で各道府県にある農業会議について新規就農ガイドセンターの窓口で、香川県と高知県の感触が良かったんで、そこに当たってて、で返事が来て」

藤田 「間に入ってる行政はどんな受け入れ体制なんですか」

小野さん「全国農業会議が窓口として、新規就農とか、Uターン組、という人を積極的に窓口として開いて、やりたい人に貸す。場所を紹介したりとか。僕は、農地を探して行ったわけやけども、僕は経験があるから、入っても何とかなるやろうということを言われている。向こうでね。作る方は経験があるから。で、全くの素人が入る場合は、都道府県の農業大学校なり篤農家に、研修生として派遣する。ある程度のお金を向こうが出してくれて、研修という形で。長いので二年とか実際に受けてもらって、それから農地

を探して、そこでやってもらう、という形を取ってる所もあるし、各県によって大分開きがあつて、やり方が違う」

塚原さん「私が奈良県の新規就農ガイドセンターが出来てすぐの頃に県を訪ねてる。奈良県の新規就農ガイドセンターが幹旋した第一号でことだね。ちょうどその頃に行政が発発して、今もう大分多いらしい、希望者がね」

藤田 「土地は結構あるんですか」

塚原さん「表にはあんまり出してないんだけどね、地元に入ってみてわかるのは、いわゆる開体事業でいって基盤整備、小さい田んぼを大きく区画整理して、道を作った田んぼにする。その時減反比率で畑が何割か必ず出来てくる。だいたい中山間地だと一番山沿いの所にまとめて畑がずらつと出来て、その下に田んぼがきれいに出来る、というパターン。その頃七、八カ所見せてもうた。そういう所がたくさん同じ近辺だけでね。どこもみんな、その一番上の畑が荒れたままで、同時に見せてもらった所のうち、私がやってる所だけはきれいになつてるけど、他はその当時のまんま。だから、そういう所は近辺だけでもあるから、無数にある」

藤田 「でも入ってないんですか」

みんな 「入ってない」

水越さん「だいたい中山間地ばかりでしょ。そこで新たに野菜とか、という風にならない」



塚原さん「私は色々な種類の野菜を作りたいんだ、てことで県に希望出した。それで、紹介されたのが茶畑にするような岩だらけの所。県の第一号だから何とかしないかん、というのもある。向こうの都合で私が出て行っても困る。だから向こうも対応はしてきたけどね。ただ五年位かかった」

小野さん「せやけど、その間何も出来ないからね。その保障は何もないしね」

塚原さん「おそろくね、三千万位はかかてる。住んでるだけでね」

水越さん「三千万円、もうたら良かったやん。でも、良かったやん、内需拡大で」

塚原さん「お金くれて、それでいいようにやってくれ、て言われてたら、もっとうまくやると思う」

水越さん「塚原さん、くれへんけど、小野、もらえるやん」

小野さん「新規就農の人には予算が下りて、就農済みの人には予算が下りない」

水越さん「荒地の開墾を含めて考えたら、それ位お金もらわんと、やれへんよなあ」

小野さん「奈良県なんかはもう、振り落とすような感じが濃厚なの」

水越さん「田舎行くと、どんどん来て下さい、というのが多い」

小野さん「四国の方はね、家の方まで、それもやらないかんねえ、という話で進めてくれる。ぼくがもつと中山間部で、という希望を出してるから。香川の場合は奨励金が出るんよ、一年間に限り無条件で」

水越さん「色々あるな、そういうの」

塚原さん「都市の近郊だと、まずそういうのはない。だから対応が全然反対なんや。要するに地権者の方

が、どんな状況でもいいからとにかく探してくれ、という状況ではないわけ。四国の方はね、先に地権者から希望を出して、それをまとめて県外へ出している、という形でしょ、正反対」

土地を持たない者にとつて農業をすることはまず土地の取得から始まる。土地には金額が付けられて持ち主が居る。買わずに借りるにしてもお金をかけずに探すのに手間が要る。耕す土地を見つげるため個人の伝手を頼ったり、あるいは行政を通じて斡旋してもらったりする。まさに近い所は高い。過疎といわれる地域で田畑の管理に体が続かなくなった高齢の人が何年も放つてしまった場所に入るとか行政のパイロット事業で山を開体した場所に入るなどして試みる。行政を介して探す場合地域によつて応対が異なる。十年以上前は行政が就農の斡旋を行うことはなかったが全国的に新規就農を支える形が取られるようになる。となると地域で応対を迫られることになる。農政としては新食管法において農法の近代化、大規模化を主な方針に置いているのは変わらないが、持続可能な農法という考え方を無視し切れず、有機農業も農業のひとつという認識を示した。過疎が進行して農村人口を増やすため切実な地域もあれば、大都市を囲つて農業にあまり関心のない地域もある。それは地域にある土地がどんな状況かによつて左右されるといえる。先祖代々の土地の上に立つのは楽だが逆に縛られる側面がある。あちこちに点在する畑を固めるよう踏み切るには難しい。いずれにしても土地が荒れていたら開墾しなくてはならない。元々の農地にも増して開体地のようなやせ地を耕していくのは時間がかかる。作物を作るためにはこの大前提の大問題をクリアしなければならぬ。

## 野菜を食べる

会の定例会でのことだった。竹村さんのトマトをめぐって話し合いになった。三年程不作が続いて「今年こそはトマトが欲しい」と消費者から声が上がった。

「僕は、いけた年のことがあると覚えているさかいに、あの、簡易の雨よけで、雨に打たれるのを止めたら大分軽減する、という関東辺りの有機農業の人たちがそんなんやって、それがもうベースになってるよ、という話ずっと前したさかいに、でそれは『天候のせいやんか』という非常に観念的な話してん。『あ今年竹村さんが住んでるとこの、あるいはみんな住んでるとこの梅雨はこんな天候やってんな』でほんまに済まされへんのかと思てな」

「それとな、また百姓の収入とも絡んでくんねんな。トマトで割とええのよ。で人気あるしね」と水越さん。

段田さんが間に入る役だ。

「僕はおばちゃんたちの言うことわかるし、『トマト欲しい、食べたいんや』という話や。雨よけとかな、『何でしたくないんですか』とか言わはんねんけどな、『したくないんじゃなくて、このままで出来ると思てるから、そんでええやないか』という論法なんや。で、それわかるわけや。たまたま三年間出来なかつたし、もし出来なかつたとしても、それはそういうもんなんや、と。要するに天の恵みや、という

わけよ。でも僕は雨よけしたらいいんちゃうかと思ったからな、『特段まずいことがないのならすべいい』て言ってたんやけど」

「せやけどな普通冷静に考えてな、割とわかると思うんやけど、まるっぴき九十九%不可能なことに挑戦してて言ってるのとは違うという認識がまずある、ていう。『いや大丈夫や、出来るって。また今年出来ひんかったら考えるわ』ていうことになったけども。で僕の経済的なことも心配してくれはる向きも充分わかってんねんけども、ほんまに心配やったら、するて。ほんさかい大分世の中に対する猿たる不安の差がな、くつきりしたというか、だいぶ違うなあと。もつとひつくるめて暮らしたい、みたいな部分であるんか」

「でトマトやから心配やねん。おいしさの差が出るやん」

「せやな」

「百姓も収入いいもんな。量穫れるし」

「せやし、提携してる以上はね、僕のトマトを期待してるおばちゃんたちが集まってるから」

「その部分では身勝手やと思てたよ。身勝手でもいいと思てたけど。あの日家帰ってからな、雪降ってきたんや。よく考えたらな東北やら北海道でも冬期はこんなもんや。農業できひんのやと。あきらめるといふ能力をちゃんと持ったはったわけや。今もう何でもかんでもオールシーズン出来るようになってしまったから、あきらめるといふことが出来んようになってきてるんやろ。そこをな、トマトでも言えると思て

たんや」

「これは本質突いてるんちゃうか。有機農業ということで括って言ったとしても」

「そりゃもう露地栽培てのが基本やもんな。ハウスとか使ってしまうと全てそうなってしまいうでしょ。うちの会もおんなじや。トマトは必ず話に出るわ」

消費者つまり作った食べものを食べる人がいると提携が出来る。消費者と一体になって共同購入会を作ろうということが可能だった時代。それはやっぱり情熱あつて成ると思う。消費者の思いの強さに驚く。食の安全性への思い。一緒に作り上げていく世界が求められていたのだ。会の人のためなら頑張つて作れるだろう。食べるもの、野菜は作ったものを美味しい時に食べてもらうのが難しい。お金で測らない部分が十年以上存在し続けたことに驚く。現金と引き換えのもの、というより理念に引き付けられる部分がちゃんと存在し、それを持ち続けたこと。すごく力が要る。会を百人位で維持すると組織として周囲も目を向けるし、まとまりとしては安定するのかもしれない。組織的にシステムを決めていってやったとしても、農産物で現金収入を得るのはぼちぼちである。生産者のやり方に合わせれば値段は一律に決められないのだが、農産物がそのような安定しないものであることをわかってもらえないのだ。野菜だけではなく果物等美味しさの差が出るものは会員さんが離れにくい。関わる人が増えると浅い付き合いになるだろうけれど、人数だけの問題でなくだんだんとそんな付き合いを望む消費者が増えているのかもしれない。そして方針も組織という枠組みだから多人数で一つの方針を持つというのは、結構歪みが出やすい歪んで

当然だろう。

食べものがどうやって作られているのか知りたい消費者は少ないのだろうか。それを知ろうと思えば、食べものに値段を付けて買うという感覚よりも一歩も二歩も踏み込めると思うのだが。食べるものを自分で作らない人がほとんどで、作ったものを食べる人が限られていて支える人たちがあまりいなくて厳しい。求めるものがお互い違ったのだろうか。買う、という感覚ならば、選ぶ、ものを選ぶ、人を選ぶ、という気持ちにつながる。そうではなく人間に惚れて付き合っていける。人付き合いが長くは続かないならば、長い間固定するのも不自然な気はする。通り過ぎるような関係ならば絶えず新たな出会いを求めている必要がある。商売的な感覚になる。共同購入会という小世界で考えるよりも個人として開いて付き合っていくのが自然だと思う。

### 田舎暮らし

段田さんの集団営農への取り組みは、話を聞いているだけでとても大変である。まず何世代にもわたり暮らしてきた村の歴史がそこにある。農地や土地に対する執着心は当然強い。段田さんがやろうとしたのは、行政が基盤整備を進めた圃場を村で共同経営しようというものだった。集団営農の実行委員のような立場をかってでて、自分の暮らしとも関わることながら地元の家々を説得に回る役を務める。もし集団営農という形で行うことが実現しなかったとしても、段田さん自身は、すでに基盤整備が出来ている場所の

中から圃場を借りて米作りをする予定だ。それにしても村としてまとまることのない、前向きな話し合いが出来ない村の暗さというのを段田さんは嘆く。

田舎育ちの竹村さんは、村のことは全部が見えてしまうから関わろうとはしない。例えば水利。水利組合に入らなくても出来る場所に田んぼをしている。畑のある所に住んでいけば色々なことが絡んでくるけれど、そうではないから利害関係が生じないように立場をとっている。「田舎に入った」という意味で同じでも、農業を主に志向して入るのと、そうでないのでは待遇が違くと竹村さんは言う。

「僕のとこに来てくれたはった夫妻が、田舎に入った。小野は農業をして田舎に入ったけど、その人たちはある体育の生涯教育か何かの資格を持って、田舎暮らししてる、経済的な算段がついた、という機関紙を作って送って来て。それにつけ小野のことを思う。その人たちは、農業では家庭菜園より大きな田んぼがあるらしい。小野はその十倍も広い田畑がある。その人たちは、すごい農業に近付いたわけ。田舎との関係もギスギスしてへんから。ある技術を持って認められて入ってるから。小野はほかの能力がないじゃない。彼はそれを志向してるから。農業しかできへん状況で入った場合は、それが百二十パーセントできてトントンや。田舎ではな」

いわゆる村の行事には、本来の共同作業とあまり意味のない因習のようなことがあって役が回って来たり維持費も要る、そして人付き合いの面では、

「田舎は、よそ者は一生、よそ者」

と水越さんが言うように生活しづらいことばかりだ。

強い思い

「僕等よ、十何年やつてるけど、いくら儲かる、ちゅう話が、いくら酒飲んでも出てけえへんのやわ。いわゆる真面目な話やな。アホやな。お金儲けをする話は疲れるわ、考えてる」と

「今キーワードは幾つかあるでしょう。別に専門家にならんでもいいけど他人事にならずに百姓が一番アピールすることやと思てんねん。僕等は知ってる農民なんやと。今までのように体制に翻弄された農民やないと。これがものすごく大きなポイントなんよ。その起点の時に第三者はあつてんけども、農民自体がせなあかんねんけども、色々と迎合してたけども、まだどっこい捨てたもんじゃない、てのもたくさんいるし、とにかく、して、単純に、どんくさいけども、そこかな、と。何十年か前からほんまにそう思てるな」

「僕たちは今の状況の中で判断する。僕たちが、この時代に、日本の中で、ちゃんと野菜作りをしよう。と。街いなく、語ろう、と。そのことと、それが、どういう風にこの時代になるか、と。僕のこの身分において語れば深い意味があつて、あんたにとつては百姓は特別やと思つ。普通のことなんよ。まず土地があつて、それを有効に生かすのが百姓だと思つのよ」

「みんな、どうしようと思つてるのよ。その術が何も無いわけよ」

「世の中は変わつてる。ある一定のレベルの中までは変わつてる。今までよりも核に関する恐怖のレベル



は変わってる。けど根本として金儲け団体がいつもほころぶという状況の中では変わってない」

「語るとほんまに厳しいけども、わが電力は何か、というと、電力の半分は要らんわ、と僕が表現をすれば、野菜は、売れへん、という」

「マスコミが情報を流すやんか。己がどう判断するか、ちゅうことなんや。すべからく思うねんけども、それらが言うとることやなくて、自分はど思うか、ということを含く考えささんところ、ささんところ、ちゅう方向で世の中動いてるわけよ。私は知らんよー、という勇氣というか、それをせんと、もうしかたないのよ。ものすごい力で、やっとなるわけ。何の乱れもないわけ。で、やってる彼等自身に何の痛みも感じてへんし、何も思てへんしな。これはもうシステムワークよ。組織悪みたいなものよ。ますますこれが、はびこると思うよ」

「今は原子力発電所でも、その、波及されてしまうでしょ。昔やったら、近辺の地域で済んでたことが、電気とか電波とか何かで。で、そのことは悲惨なことよ。滅亡につながることをやわ。そういう時代なんやと思う」

### 百姓を志向する

なぜ農業にこだわるのか。そんなことはほとんど考えるに及ばない人がたくさんある中にいても私は農業志向である。運動家ではない。有機農業運動という活動があるとすればそれをやる人にはなれない。で

も人にアピールする必要がある。主張をせずに組織とかシステムの中に組み込まれる方法もあるけれど自分の色を出すならば人に対して表現して行かなければならない。二十年前もつと尖るような勢いで農業に翔た人がいた。彼等にも多くを教えられた。焚火の仕方。もぐらは芋を食べに来るのではないこと。月がとても明るいこと。雑草が美味しく食べられること。多くのことを知っている。どうすれば食べものを美味しく作ることができるか、どうすれば…。

それは彼等が得た知恵である。その知恵は尊い。

食べものを生産している人の特権がある。それは育むべき生命に関わること然り、それを食べてもらえること然り。やっている人にしかわからないことだ。それを、お金を得る仕事としたら、変わってくるもの。虫は害虫、草は雑草、水、獣。それらの対象は見方を変え、生産者として自然と折り合っていく。私はずっと農民をするのには自然と折り合うことが一番大変だと思っていた。ところがそれは違った。人間と折り合うことだった。土地の取得、土地と生産物の管理、消費者、そして村付き合い。それらを変にしている原因は農業を大切に思わない人が多いからに他ならない。何故なのかわからない。もつと大切にしようよ、と言いたい。

## 第六章 生産者の声（二）

ムラはどうなる 水越寛宣

数年前、友人のムラでの出来事である。「農村振興」（詳しい名称は分からない）の補助金を当て込んで、公民館を新設するという話が持ち上がった。そもそも、トイレや台所は、少し前に新しく増築されたばかりで、日々様々な集まりに使われているが、何の差し支える節もなかったらしい。

自治会より、青年層（二十才〜四十才）の組織である消防団に、数日後に解体するので協力願いたい、との知らせが入った時点で、話は、一変し「ムラは、大いに揺れた」のである。

「農業をやるつもりはない。たとえ数年は親父たちが頑張ったとしても、その後には国の検査が入れば直にばれてしまう」と、多くのサラリーマンたちの殊勝な意見。「詐欺まがいの計画で、まともでない農政の補助金を利用するのは、百姓を馬鹿にしている。農村振興と公民館新設とは、次元が違う」と、数少ない後継者の声が上がった。

ムラは、まだ家父長制を残しており、若者と膝を交えて、未来を語ることなど考えも及ばないことであつた。素直であつたはずの息子たちが、主旨の違いはあれど、全員が突然造反したのである。親心子知

らずとは、正にこのことで、青天の霹靂だったのであろう。

自治会（父親たち）側は、「ムラのため、皆のため、いまを逃しては二度とできない。だめになったとしても、行政は許してくれる」、まともな説明もできずに同じことを繰り返すだけである。一方、十年間の事業計画の仕掛人である普及所は、もつと深刻で「この事業を断ると、次から市や県からは、相手にされないよ」「もう町（ムラ）を歩けなくなる。お願いです…」。威しと、お涙ちようだいの保身には、ふと可哀想になってしまふほど、悲愴感が漂っていたという。

具体的には明らかでないが、いったい十年間で、ムラをどのように蘇生させようとしていたのだろうか。かつて、スイカや乳牛の飼育で栄え、イチゴで名を成した。しかしもう十年二十年以上も前のことである。今では、五十戸ある中で専業農家は、わずか五軒、うち三十才、四十才台の後継者は、たったの三名だけなのである。どうにもならないことぐらい、誰の目にも明らかであったのだ。

後日談として、ひそかに自治会役員が交代し、普及所のメンバーの多くが変わったそうである。また、何処かのムラで公民館が建ち、無事に予算は、処理されたそうだ。そして、ムラも何もなかったかのようになり、いつもの静けさを取り戻したという。

「ムラづくり」を、肴に酒を飲むにはことかかない。先の公民館同様、「六メートル、いやこれからは十一メートルの道にもらった方がいい」「水田への取水も、バルブ一本にもらったほうが」「公の施設を一つでも持ってきて建ててもらったら良くなる」。全て我田引水、他力本願の交錯した夢物語

は、杯が進むにつれ花が咲くのである。そこには、必ず昔気質の根性のある百姓が一人ぐらいいて、頑固に「土地はよう売らん」とでも言おうものなら「変わり者」のレットルが貼られ、彼奴のおかげで「ムラは良うならん」と、いよいよ宴は盛り上がってゆく。

しかし、米作りに欠かせない「水」のこととなれば話は別である。道作り、川ざらえ、他の堤の清掃などは、年に幾度と点検・整備する共同作業として行われる。米が生活の基本を保障した時代ではなく、なままでに管理されていて、複雑な起伏の四十ヘクタール近く、数百にもものぼる水田へと、一滴の水をも逃さぬよう分配されていく。けっして、個人の方では成しえない、アリやハチの世界に似た仕組みである。長く抑圧され続けた先人たちの血と汗、知恵の結晶だと思ふのである。この夏の空前の旱魃でさえ、豊作を与えてくれたことは、それを証明している。すなわち「ムラ＝水」なのである。

四半世紀ほど前の、確かな光景には、おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは、川で洗い物をする姿があつたことを覚えていゝる。休みといえは野山を駆けていた。小川や他の水は清く澄み、群れ泳ぐ小魚をみつけては、追い回し、ずぶ濡れになってはしかられていた。里山は、来たる家普請の木を育て、燃料・四季おりの恵みを与えてくれた。池や川は「用水」としてだけでなく、コイ、フナ、ドジョウなど、食卓のメイン・ディッシュを育てていた。

「皆様のため…」と持ち上げては、切り捨てる。「地球にやさしい…」と、ドクを売ることばかり考え

ている。もはや、清く正しく美しいはずの理性は、地に落ちてしまったようだ。

少しは信望していた人物さえ「わざわざドブ川やドブ池を清掃しなくても、ちよつとばかり外に行けば、いくらでも美しい所はあるんだ」と、いう始末である。子供の頃に歌った「カエルだつてアヒルだつて、金持ち（貧乏）だつて、みんな、みんな飼われているんだ友だちなんだ……」という、替え歌でさえ、人も水溜まり湧いたボウフラ同様、ある日突然地球にポロリと生まれたことを理解（う）していたのである。

ドブ清掃が近代社会の歪みを、土台から改善するものとは思わない。しかし、「美しい所」は、世界から徐々になくなり、確実に、遙か遠くへと逃げていくことだけは事実のようである。

ムラの良さは、その中に住んでみるとみつけにくいものである。封建的な体質が鼻に付き、理解しがたいことばかりで頭が痛い。しかし、一步都会へ出てみるとよく解る。かならずといつていいほど、頭の奥の方が、ズキズキと痛むのだ。空気中の酸素量が少なくて、脳細胞が酸欠状態になり、その他々の毒素と結合して、ゾクゾクと痛みだすのだろう。三十数年余りの農村生活で作り上げられた肉体が、都会の体質には合わないということを知っているのだろう。だから、田舎外の都会人が、よく旅行をするのにもうなずけるのである。

百姓を始めて十年、ムラは、風前の灯火である。何処からどう間違えておかしくなったのだろう。アダムとイブ、それとも天照大神が酒を飲み過ぎて手元が狂ったか、はたまた天命なのか。もうそんなことはどうでも良いのである。二十一世紀始めには、地球規模で食べ物が不足するという。現代の万能の神であ

る「金や科学の力」でさえ止めることはできないらしい。これまた他力本願だが、ムラも目覚めるときが来るようだ。待ち遠しい限りである。

だがよくよく考えてみれば、少々きな臭い。食糧不足とは、国家の一大事、お上がムラの倫理やオキテを用いて、米や麦・大豆など、やたらやかましく「増産ダ、作レ、作レ」というにきまつている。もう御免こうむりたい。その時には、何処か誰も知らない山奥にでも入り、愛する人たちと有形・無形の豊かな生活をしたものだ。『もういくつ寝ると食糧難、食糧難には、ケツまくり、鍬、鎌持って逃げましょ、早く来い来い、食糧難ダ』

### 自然体でゆこうよ 小野裕次

実のところ、正直いってぼくは百姓ではありません。生まれも育ちも東京で、野菜づくりも田植えのことも何も知らずに、二十数年東京という巨大なブラックホールに片足を突っ込んで生活してきました。

ただ何となく飾り気のない自然に憧れ、そんな中で生きていたいと思っていた事が、農業へも結びついてしまったわけです。

農家出身＝農業者という図式が当たっているとすれば、ぼくはただの自由人。いや芸術家ぐらいにはな

りたいですね。

それはさておき、繰り返すようですが、僕は百姓仕事はしていても農業はしていません。野菜も米も自分で作って、三月十五日の確定申告の締め切り日までに税務署へ出かけてゆき、職業欄には農業と半分顔を下へ向けながら書き込んで、税理士には「税金（国税）が払えるよう来年はもう少しガンバッテ下さいネ！」と、励ましか馬鹿にされているのかよくわからない言葉を優しく？かけられ「ハイッ」と答えて納税額欄にゼロの数字をもらって帰ってきています。

だから農業という言葉を使うのは一年一度きりで、三六五日マイナス一日イコール三六四日は、農業していることなど考えてもいません。それが良いのか悪いのかはこれを読む人の判断に任せるとして、本題に入りましょうか。

想い焦がれて愛する人に求愛するように百姓をしたいと思いついて、足かけ十余年になりますが、現在は百姓仲間の紹介で約三反歩（九百坪）の田んぼを借りて、野菜と自家用のコメを作って四年になります。

この間あちこちの農家で住み込みで働いたり、実習したりを続けていたのですが、作物はやはり適地適作が原則。何でも作りたいけれど、それが出来ないのが狭くて長いこのニッポン。

四苦八苦しながら、仲間のアドバイスを受けながら、最近になってどうにかこうにか野菜らしきシロモノが作れるようになってきたところです。

タネを播いて肥料と水をやりさえすれば、作れるものには違いないけれども、工場生産とは程遠く、そ



う簡単にできるものではありません。いくら手間暇かけても、台風一つの上陸で絶滅なんてことも多々あるのですから。

そんな事の繰り返しで、日々の生活は自転車操業そのものです。かろうじて国民健康保険に入ってはいらぬもの、国民年金には加入していないし（入る気はさらさらないけれど）、生命保険などは雲の上の存在で、交通事故でも一発起きれば身の破滅は必至です。

こんな文章を読んだら、誰も百姓（もしくは農業）をしようなんて気持ちにはならないだろうけれども、まだまだ続きがあります。ありますよ。

思い起こせば七年前のこと。僕はリュックサック一つを肩にかけ、アジア放浪の旅に出ていました。神戸からフェリーに乗って中国の港上海を皮切りに、デッカイ大陸を陸路であちちへウロウロ、こつちへウロウロしていたのです。とりあえずは入った国の大きな街へ行くことになりましたが、心と体は自然と中央とは離れた辺境の地へと向かっていました。民族も、習慣、宗教も日本では想像もつかない世界が待ち受けているのに、なぜかそこへ足を運んでしまうと自然に体が溶け込んでゆく心地よさを味わうことができるのです。そして、決まってそういう地域は物質面では日本ほど豊かではありませんでした。けれども子供たちもお年寄りも、言葉に言い尽くせぬほどの豊かな表情を見つけてくれたのです。喜びや悲しみ、笑って泣いてと当たり前前のしぐさがものすごく新鮮に感じられました。夜中の十時十一時にコンビニの前でたむろする塾帰りの日本の中・高校生の姿を想像すると、あわれみにも似た感情が湧いてきます。

おそらく、僕のような通りすがりのツーリストにはわかるはずもない苦労がその人たちにはあるはずなのに、そんな素振りも少しも見せず日々を過ごしているようでした。自然体。まさにこの言葉がピッタリ当てはまる風景を心に刻み、僕は日本に帰ってきました。

ほんの一年余りの浦島太郎でしたが、改めて目の当たりにする日本の風景には戸惑いを感じずにはいられませんでした。経済という大きな歯車の中で押しつぶされないよう必死で働き続けるサラリーマン。今という時間を考える間もなく後ろから押され、立ち止まることすら許されない社会の流れに、僕の体は硬直状態となっていました。

それでも人間とは結構順応できるもので、徐々にではあるけれども世の中の流れについてゆけるようになってきました。でもなければ今頃は首に縄をくくりつけてアノ世へ行ってしまうことでしょうか。

とは言え、初心忘るべからずで、百姓仕事をする生活は今でもしているので、経済の歯車にのみ込まれずには済んでいようです。ただ歯車からはみだしているとは言いが辛いところで、所詮そのすき間を行き来している自分を認識はしているつもりです。

どんな社会でも歯車が大きくなればすき間もその分たくさん出てくるはずだし、一人や二人はみ出たところで社会の流れは簡単には変わらないでしょう。それでもネガティブな生き方をする必要なんてないのです。流行りすたりがあるように、価値観だって時代によって変わるもの。現在良しとするものが十年経つたらベケなんてことは十分あり得るのだから。

ありきたりの情報に惑わされず、五感で感じるものを信じて、世の中の流れを見据えるファインダーにはいつも研ぎをかけておけば、自ずと求める先が開けてくると思っています。誰よりも自分がヴィヴィットに感じられる状況は自分で創るしかないのではありませんか。

それともう一つ付け加えたいこと。例えば百姓しようと思うのなら、先にも書いたように、天候に左右される毎日を送るわけで、必ずしも経済面では期待しない方が無難だということ。週休二日もなければボーナスもない。まして定期定額のお金などあるはずもないのです。それらをリスクとするならば、常に背負って生活しなければならぬことを肝に命じて行動して欲しいものです。

晴耕雨読とは誰が言った言葉か知らないけれど、現実にはそうもゆかない日の多い百姓生活ですが、春夏秋冬と四季の移り変わりを少しでも楽しく暮らす気分と意気込みさえあれば何とかなるものです。

ネパールのカトマンズという街に居た時でした。フリーク・ストリートというヒッピー全盛の頃欧米人のツーリストで賑わっていたという、さびれた路地のみやげもの屋の軒先を見て歩きするのが好きで、よく足を運びました。フリーク（気ままに）。この言葉を僕は大好きで、気分は Freak Free（気ままに自由に）を心の底に秘めつつ、貧乏百姓を続けています。

借地借家の根無し草百姓はこれからも続けてゆくだろうし、そんな気分で語り合える仲間が一人でも増えてゆけば「日本も捨てたもんじゃない」と言えるようになる気がしています。

明日もまた、一粒タネ播くひととなり。

第二部  
消費者はいま  
境  
毅

## いきさつ

九五年に枚方で開かれた医食農共生ひろばの発足集会に旧知の藤田美佳さんを見かけたのが、いったん頓挫していたこの本づくりの再出発となった。もともと九四年の一月に、小林さんから毎年正月に「やる気百姓の寄り合」ということで生産者が二十名位集まって交流会をしているので、その人たちのことを本にしてはどうですか、という提案があり、皆さんに文章を書いてもらって出版しようという企画が生まれた。ところが、実際にその年の年末までに四苦八苦しながら原稿を書いてくれたのは、この本の生産者の声の章に収録した五名で、分量が足りなかった。それで、座談会をしたり、聞き取りで分量を増やそうと一人の方に取材を頼んでいたのだが、その方が事情で原稿が書けなくなり、本づくりは中断していた。

京大農業ゼミの省農業ミカン園での調査に、取材のために参加したことがあり、その時に知り合っていた藤田さんに思わず、本をつくりませんか、と声をかけたのだった。当時百姓をやりたい、と考えていらした藤田さんが引受けて下さり、取材やテープおこしに苦労しながら第一部の原稿が出来たのが、二〇〇〇年の春のことだ。私は消費者の動きも入れたいと考えていたが、取材を開始した九八年頃から、新しく協同組合的な社会をめざした運動団体であるアソシエ21が設立されたり、地域通貨キョートレッツが始まったりで、とうてい原稿を書いたり、編集したりする頭の余裕がなくなってしまう。

やっと頭に余裕が出来たので、これまでの取材にもとづいて、第二部をまとめてみた。出来上がったも

のは、共同購入会の消費者の全体像を明らかにするには不十分で、せいぜい私自身の会合に出たときの経験や、見聞きした事柄の範囲での記述にとどまっている。でも産消提携の共同購入会を続けていらっしやる人たちの考え方だけは紹介できている。若い人たちが読んで下さることを期待している。

## 第一章 枚方・食品公害と健康を考える会

小林美喜子さん、俊雄さん

枚方・食品公害と健康を考える会（以下「会」と略記する）設立以来十五年間にわたって世話人代表をつとめた小林美喜さんは、六〇年安保闘争の時代に京都で学生生活を送った。ユネスコの活動に参加し、三回生の時にはユネスコ会長になった美喜さんは、当時の反政府的な一般的思潮のなかで、卒論のテーマを「社会に出て何をするか」としていた。

社会運動についての問題意識をもっていた美喜さんも卒業と同時に、松下電工に勤める俊雄さんと結婚し、二男一女をもうけ、家庭の主婦として日常に生きていた。

ところが一九七二年春、長男が小学一年生の時に、俊雄さんが難病にとりつかれて、平穏な日常生活に

転機がおとずれた。学生時代、グラランドホッケーをやっている生来健康には自信をもっていた俊雄さんは、経済の高度成長期に合わせてアメリカ型の食生活をし、喫煙やつきあい酒など平均的な日本のサラリーマンの生活をしてきた。突然おとずれた症状について俊雄さんは次のように述べている。

「胃潰瘍、胃腸機能の低下、肝機能の低下、自律神経失調、三叉神経痛、視神経異常、心悸昂進、体のあちこちの筋肉のヒキツリ等々を併発し、拷問にも等しい一年半でございました。何度も自殺を考え、遺言状までも書きました。特に三叉神経の痛みには参りました」（『小食健康実践のすすめ』八十六頁、八尾健康会館友の会発行）

一年余り有名病院や漢方医、針灸院をたずね、あらゆる手だてをつくしたが治療の道はなく、もはやこれまでと観念しはじめた頃の一九七三年夏、甲田光雄医師と出会えたのだった。初診で甲田医師に「あなたの腹が悪い、腹を治さんと症状は治らない」と言われ、医師不信にこりかたまっていた俊雄さんは「この藪医者め」と思いながらも、この診断は初めてだったので、「ままよ、どうにでもなれ！ 命を託すか！」という気持ちで翌日から食餌療法を始めたのだ。

後からわかったことだが、六四年に盲腸炎で手術しており、そのときの手術後の癒着で腸の通過障害を起こし、以降便秘気味になっていて、大量の宿便がたまっていた。小食、玄米食、断食を組み合わせた甲田式療法を始めて五ヶ月、腸の癒着がはがれた後にやっと大量の宿便が出、以降快方にむかい、七四年四月には職場復帰ができた。

この難病治療体験の後、小林さん宅には人づてに病気で困っている人たちが訪れるようになった。また有吉佐和子の『複合汚染』が出て、食品公害が社会問題となってくるなかで、「何か小さなことでもいい、世の中のお役に立つことがあれば」ということで、食品公害と健康についての勉強会を始めているうちに、医者、研究者、農家など色んな人たちとのつながりができ、「会」の結成をむかえることになる。

#### 日本有機農業研究会（有機農研）

日本有機農業研究会が結成されたのが一九七一年、その数年後に有機農産物を求めて共同購入会が雨後の筍のように生まれた。有機農研結成の前には有機農業者は変わり者とみられ、出荷先としては大都市に数件ある自然食品店だった。その頃の自然食品店は桜沢如一が始めたオーサワジャパン、ムソー食品、あと宗教団体位のもので、渋谷に天味が比較的大きい店舗を開いたときも調味料や機能性食品が中心で、野菜は多くなかった。

お茶の水クリニクスの森下敬一医師や西式の断食道場、桜沢の玄米菜食療法などの、難病をかかえた人たちのかけこみ寺に来た人たちが食養に必要な食材を求めて買い物に来ていた。

有機農研の結成趣意書には「農学者がその農法を転換させるには多かれ少なかれ困難を伴う。この点について農産物消費者からの相應の理解がなければ実行されにくいことは言うまでもない」というように、消費者の役割についても述べられていたが、どちらかと言えば、生産者からの消費者への働きかけが



重視されていた。「まず食物の生産者である農業者が、自らの農法を改善しながら、消費者にその覚醒を呼びかけることこそ何よりも必要である」というように。

ところが消費者の側の覚醒が急速に進み、全国に数百名規模の共同購入会が多数出来てくることで、産消提携運動が形成されてきた。有機農研はこの動きを受けて、七八年に提携十ヶ条を定めた。

この提携十ヶ条は後にさかんになる生協の産直や、個配の事業体と、有機農研の産消提携運動との違いを際立てたものとしての意義をもっていた。

その基本は三つある。一つは「生産者と消費者の提携の本質は、物の売り買い関係ではなく、人と人との友好的な付き合い関係である」とした点で、有機農研の産みの親の一人である一楽照雄さんの「食べものは商品にしない」という思想が具体化されている。二つ目は生産者が生産したものの全量引き取りである。三つ目は配送については原則として第三者に依頼しない、とした点だ。

この三点は、八〇年代に入って有機農産物が社会的に認知され、有機農産物の取り扱いを提携関係ではなく、事業として行おうとする事業体が有機農研の会員の中から出てきたときに、大論争をまき起こす原因となった。そのとき有機農研の幹事会は、この提携十ヶ条を原理原則とみなし、大地を守る会やポラン広場、JACSなどの事業体の事業を研究会の活動としては認知しないという方向をとった。

とまれ全国各地に共同購入会が生まれつつあるとき、枚方にも枚方・食品公害と健康を考える会が誕生したのだった。

## 枚方・食品公害と健康を考える会

「会」の発足にこぎつけるまでの事情について、小林美喜子さんは回想している。

「勉強会を開くために甲田先生や丸山博先生に講師をお願いしましたが、橋本行生先生と知り合いになったのも大きかったです。主人の病気の経験がもとにありましたので、会の構想は、当初から食と医を結びつけて考えていました。そして私が最初に知り合った生産者の松添さんからは、土づくりなど有機農業の基本について教えてもらいました」

七五年七月二日、枚方市民会館に七十余名が集まり、「会」の発足会を行なった。その場で世話人が選ばれ、以降月一回の世話人会と定例学習会が開かれるようになる。定例研究会には甲田医師や山口卓三さん、小谷純一さん、橋本行生医師、槌田劭さんらが講師となり、毎回六、七十名の参加者があった。

「会」を発足させると時代の風を受け、九月の発足記念講演会を終える頃には会員は二百名に達していた。この拡がりを土台に農産物の取り扱いが始められた。じゃがいも、さつまいも、みかんから始まり、翌年五月以降は石けんなどの日用品や野菜も取り扱うようになる。

「はじめの頃はうちの駐車場が倉庫でした。庭で仕分けをし、部屋は事務所でした。当時は農産物のこととは何も知りませんでしたから、青果屋のおかみさんだった母に、色んなことを教えてもらいました。母は子供たちの世話をしてくれただけでなく、雨の日にはぬれないようにみかん箱に木でゲタをはかせてく

れたりと、会の仕事を手伝ってもらいました。

当初は生産者が配送していましたが、配送が終わった後、うちで食事をし、引き続き夜遅くまで生産者会議をやっていました」

三年目の七七年、事務所と倉庫を借り、三人の生産者を配送担当に、また事務専従担当者もおいて、事業としての体制を確立するとともに、三冊の小冊子を発行し、「会」の教育宣伝活動に役立てた。さらに橋本行生医師の指導で家庭療法研究会をもうけている。

四年目には配送担当者を生産者から専従職員へと切りかえる方向性が出され、五年目の七九年には新しく青年職員を配送担当者にむかえたことで、トラックの購入に踏み切った。六年目には『主婦がつくった料理手帳』を二万八千部発行、これは大反響を得て二年で完売し、八二年に四万七千部増刷している。

### 「会」の基盤の安定化

こうして立ち上がった「会」は食と健康と農の分野でさまざまな運動を展開しながら事業体としても成長し、九年目の八三年には生産者が提供してくれた土地に二階建ての自前の配送センターを建設できた。

「でもここまできるとにも色んな問題がありました。特に配送専従者の問題には苦労しました。それで入植をめざして訪ねてきてくれた竹村さんと平尾さんの若者二人に出会えたことで、配送を中嶋さんを加えた三人におねがいすることになりました」

もともと配送以外の仕分けや事務は、会員の中から有給の事務職員やパートやボランティアでこなしていた。配送担当を生産者が引き受けることで「会」の経営は安定し、以降この体制は今日まで続いている。

「会」の経営基盤が安定したことで、小林さんは、大阪府下全域への学習啓蒙、実践普及活動に参加した。その取り組みは、「使い捨て時代を考える会」「ノアの箱舟会」「有機農業関西グループ」と共催で「明日の有機農業運動にむけて」と名づけられた交流集会を八八年に実現することにつながり、以降主催団体を増やしながら、三回の集会が持たれている。

小林さんの活動が枚方の地域から大阪府下へ、さらには全国の方とも連携しながら広がっていく中で、八九年には「会」の代表を桑原さんと交代し、小林さんは後の「医・食・農共生ひろば全国ネットワーク」につながる家庭療法を軸としたサークル活動に力を入れていくことになる。

## 第二章 医食農共生ひろば

### 共生ひろばの発足

一九九五年九月三日、大阪の枚方市で「医・食・農共生ひろば」全国ネットワークの発足集会があった。会は主催者の予想を肥える三百名近い出席者を迎え、熱気にあふれたものだった。

この会を構想したのは小林美喜子さんであり、そして、彼女自身もその一人だった「有機農研三人娘」の浅井まり子さんと境野米子さんで呼びかけ人となって集会が呼びかけられた。有機農研の運動が伸び悩んでいる中で、有機農研のメンバーの中には、停滞から脱皮する動きとして、「三人娘」のこの動きに期待する人たちも多かった。

浅井まり子さんは一九七〇年藤沢市で食生活研究会を始め、以降有機農産物の提携運動にたずさわり、著書『ハイヒールを脱ぎすてて』（家の光協会）で有名である。

もう一人の境野米子さんも福島土といのちを守る会の代表をつとめて提携運動にかけまわっていた人だ。著書に『米子の畑を食べる』（七つ森書房）がある。

二人とも一楽さんをはじめ有機農研を立ち上げた人たちからすれば、丁度娘の年代にあたっていた。発足集会は共生ひろば申し合わせ事項を決定したが、そこから目的の部分を紹介しておこう。

「※予防医学に根ざした健康づくり

お金のかわからない、クスリに依存しない健康づくりと家庭療法、民間療法の推進（食事療法、操体法、楽健法、気功、温灸、尿療法、……など）

※生命と環境を大切にする農学の推進

※全国各地に生命と食・農・環境を大切にする共生ひろばの推進」

全国ネットワークは、この発足会に来ていた大浦博美さんたちの若者が編集局を担って機関誌を発行し、創刊号には有機農研の大御所たちが寄稿している。小林さんは全国各地で健康道場をつくりながら、地域での集会を持ってネットワークを拡大しつつ、年一回のイベント的な全国集会を構想していた。

### 有機農研京都大会

九八年二月に京都で有機農業研究会の大会があった。樋田さんからの呼びかけで、私は大会準備委員に加わって準備を手伝った。入会していたものの、会の催しには参加したことなかった私にとって、著名な会員に間近に接することができて満足だった。

大会では、従来原理主義的立場から株式会社などの事業体として成長していった会員たちに対する批判がなされてきたが、このような幹事会の姿勢に対する反省がなされたのが印象的だった。

もちろん、会員の中で食べものは商品にしない、という故一楽さんの提起が忘れられたわけではない。

大阪の尾崎零さんの話では、提携には色々な形があつていい、ということでも多様性を認めよう、ということだったようだ。

尾崎さんは生産者一人が四十世帯くらいの消費者と結びつくように運営されていくことを理想としていた。例えば消費者が生産者と共に共同体をつくるアメリカのバイオダイナミック農法を一つのモデルと考へていたようだ。

浅井さんや境野さんは、共同購入会は大きくなりすぎるとダメ、二百〜四百世帯が適正規模じゃないかしらと話していた。この規模は配送を生産者中心で行える範囲であり、これを越えると配送に職員を雇わなければやっていけなくなるからだ。職員を雇うとなると、法人化の問題が出てきて、運動というよりは事業体としての性格が出てきてしまう。

有機農研幹事会と大地を守る会やポラン広場など事業体を追及しようとする人たちとの対立が激化したのは八〇年代末のことだったが、以降十年それぞれすみわけていくという道が示されたのだろう。

このような事態の背後には、有機農産物の認証制度づくりにむけての動向があつた。有機農研としては、いたずらに対立しあうのではなく、認証団体づくりにむけて共同していかないと話にならなかつたのだ。この大会では有機農研が認証問題にきちんとかかわっていくことが確認された。

## 第三章 生産者の声 (三)

コンテナ通信より 中嶋泰人

「田」の中の蛙<sup>かわず</sup>



中嶋さん (2001年)

「井の中の蛙」という言葉があります。昔は、田舎で百姓をやっている人々はこれに近いことだったかもしれませんが、きょう日はどんな過疎の村にも、テレビや電話もしれないのですが、きょう日はどんな過疎の村にも、テレビや電話があり、新聞も雑誌もすぐ手に入ります。天安門事件やベルリンの壁崩壊だって、リアルタイムで晩酌の酒の肴にすることができのです。こういうありがたい時代に百姓暮らしをしていると、ひよつとしたら、むしろ都会の人たちの方こそ「井の中の蛙」的状况に置かれているのではないのかな、と思うことがあります。高層ビルや地下街という人工的空間に囲まれ、情報の壁に埋まるように暮らすのも、大変なことにはちがいありません。遠く大阪市内のビル群を眺めやりながら鍬を振り、種撒く生活の中で考えついたことを綴った、独断と偏見だけが取り柄の、田の中の蛙のたわごとであります。



## 神主さんの装束がりっぱな理由

秋祭りをひかえた日曜日。ムラの役員総出でだんじりの飾り付けや神社境内の清掃が行われ、私も消防団の役員の一人として顔を出していました。ただ、なにしろ稲刈り直前とあって、そのまま田んぼへ出る予定にして、いつもの農作業の服装のまま参加したところが、ある人の曰く。「なんや中嶋のそのカッコウは。カビの生えたような麦わら帽子やし、ベルトの代わりにひもで結んで。きょう日、そのへんの案山子の方がもっとまともなもん着たはるで」「…そやなあ。言われたらそのとおりや。そやけど、これは百姓の舞台衣装か制服みたいなもんで、ちょうどあんたらの背広姿みたいなもんや。このカッコウしてたら誰が見ても金の儲からんユーキノギョーの百姓に見えるやろ。たとえば、むこうにいたはる神主さん。あの神主さんというのは、平安時代のままの装束を身につけていやはるさかいにこそ、誰が見ても神主さんらしく見えるやろ。もしも、あれが背広着たはったら、ちよつと悲しいで。ありがたい祝詞を上げてもらう、いっしょうけんめい御幣振ってもらても、あんまりききめありそうには見えんやろなあ」「中嶋のカッコウと神主さんの装束をいっしょにしたらあかんがな」「そやけど考えてみたら、あの神主さんの装束こそが、実はすごい力を持っているように思えるんや。たとえば、農家のオッサンが出荷したリンゴを買って、それが痛んでたりしたら、世間の奥様方はきつと店の兄ちゃんに文句言うに決まっているやろ。あるいは、少し前の話やけど、たいしたものでもないもんに勝手に『有機栽培』のシールを張りまくった

言うて、公正取引委員会が調査に乗り出した、なんてことがあったわな」「そらしないがな。その通りやねんさかいに」「そう言うけど、考えてみ。出雲の神さんに仲を結んでもろた二人が離婚してしもた場合に、いったいどの神社で金を払い戻した、いうようなことがあったんかいな。あるいは正月に豊作を祈願して目いっぱい賽銭あげた日本中の農家のオッチャンたちに、『思わぬ不作ですんまへんでした。あの金は返させてもらいまっさ』いうて弁償してくれた神主さんがいやはったやろか。ほんま、神主さんが背広着んわけがようわかるやろ」「むちゃくちゃな屈理屈やなあ」

というようなことをしゃべっているうちに、どうやらだんじりの飾り付けは終了となり、いそいで田んぼへ出かけることが出来ました。

## 「私」的 社会

脱サラをして農業を始めるということは、いわゆる「転職」ということは少し違うようです。就職情報誌にも、農作業手伝いのパートぐらいならあるかも知れませんが、農民募集などということはありません。農民は人から雇われているのではない、というなら社長なのか、となるのですが、そういうものでもありません。要するに、他人に雇われたり雇ったり、ということにはあまり関係のない世界のようなのです。

そういえば、今は就職難の時代のように、特に女子大生あたりが大変なようです。男女雇用機会均等法なるものもあって、それが守られているとかいないとか、マスコミをにぎわしています。ただ、ちよつと

考えてみれば（当人たちには気の毒な気もしますが）、この自由主義経済の日本では、誰を雇おうと雇うまいと、雇う側の勝手じゃないのかなという気もします。社会主義国日本ではないのですから。社長が自分の娘を無試験で会社に入れたことをエコひいきだと言う人がいるでしょうか。社長の息子を独断で専務にしたからといって、不公平だと言えるのでしょうか。NTTも、JRも、朝日新聞も、住友銀行も、松下も、みんな言ってしまうえば私企業に過ぎません。基本的には、うちのムラの駅前酒屋さんや鍛冶屋さんと同じことなんです。そういうえば、このごろはめったにないのですが、ひと昔前には鉄道のストライキがよくありました。恒例行事の感がありました。あれなんか、国鉄（今はもうありません）は公なんだから公共機関としての立場をはずれたストライキはけしからんのですが、私鉄についてはわれわれがとやかく言う筋合いではないのだ、と考えています。

私鉄と言っても、基本的には遊園地のおサルの電車と同じことです。サルが、エサの少ないのに腹を立てて、運転台に乗らないのと同じようなものではないでしょうか。公共性を言ってみたとこで、どちらも一般の我々が金を払って自由に乗る、という意味で同じようなものです。

ついでにこの屈理屈で言えば、国公立大学はマカリナランですが、私立大学での金による裏口入学が、なんであんなに言われるんやろと思います。そして、公営の下水処理場やゴミ焼却場からのヘドロや煙は公害に違いないけれども、その辺の工場から出てくるものは、決して公害なんかじゃなくて、私害に違いありません。

### 田んぼもアタマも親ゆずり

田舎は自然がいっぱい人間味あふれたユートピア……などというのは、このごろの都会人が思うだけのことです。昔、田舎の暮らしが米作りで成り立っていたころ、ムラ全体がひとつの企業や会社のようなもので、人々は助け合いもしただろうけれども、反面、競争の社会であった。というのは、今のサラリーマンの皆さんが日ごろ感じられているのとそんなにちがいはなさそうです。そのころ、農家の経済力というのはひとえに収穫した米の量で決まったのであり、それは何と言っても田んぼの面積が物を言いました。小作人のセガレが、朝は朝星、夜は夜星、どんなに努力ががんばってみたところで、大地主の息子になうわけがありません。豊かな自然環境とは裏腹に、小規模農民の怨嗟の声がもれていたのが現実なのでしよう。

しかし、時は移り、今や自己の可能性が親ゆずりの土地にしばられる、などという理不尽なことは無くなりました。「誰であつても勉強でがんばれば、将来の展望は明るいハズだ、そういう自由な社会に我々は幸運にも生きている……」と思っている人々がほとんどのようです。その為に塾だ、英会話だ、進学校だ、予備校だ、と努力努力の日本の国なのでしょう。しかし、昔、田畑が親からゆずられたのと同じように、セガレのアタマの構造だって、その大まかな部分は親からゆずられたものに違いありません。田畑を相続するのと、DNAが遺伝するのは、仕組みとしてそれほど異なるわけではないような気がします。

一生懸命に英語を学んで、外交官や商社マンになれた人はいいでしょう。数学を勉強して学校の先生やエンジニアになれた人もいいでしょう。でも、そんなのは同級生の仲間の顔ぶれを思い出してもマレな部類です。入学試験や、入社試験という投資としての意味あいにはわかるとしても、勉強などということのほとんどの部分は、無駄なオツキアイという程度のものであります。ちょっと考えてみればわかることですが、本当に才能のある子供というのは知識を吸収すること、まるで乾いた砂かスポンジに水がしみ入るようなものなのです。時間をかけて、努力、努力の勉強などというほとんどの子供の能力など、そんなに期待されてもいない、というのが本当のところなんでしょう。

もしかしたら、大部分の子供たちに勉強を通して期待されているのは、勉強の中身そのものよりも、どれだけしんぼうするか、忍耐するか、言いつけを守るか……などということではないのでしょうか。日本という国に生きる一般大衆に期待されているのは、そういうところなのでしょう。結局、昔の田舎に暮らした人たちも、今の都会に生活する人たちも、シクミとしてはそんなに大差はないように思います。

### 補助金ということ

農業と言えば「補助金」というのが合い言葉のように言われるこのごろです。もともと国民の税金である補助金を、たいして役にもたない農家にばらまいてケシカラン！という声が、あっちこっちから聞こえて来ます。でも現実として、私らそんなにいたっていないわけではありません。圃場整備も、用水路

も、大型機械を揃えるのも、りっぱな牛舎を建てるのも、結果としてそのお金は土建屋やメーカーに行ってしまう訳で、本当に農業のための補助金か、と考えてしまいます。

こんなことを考えてみました。例えば、黒猫ヤマトの宅急便のトラックが毎日、夜昼となく国道や府県道や市道の上を東へ西へタダで走っているのはどういう理由からでしょうか。JRの線路の上を京阪電車の電車が走らせてもらえる道理はありません。「あなたの会社のゼニ儲けやからには、自分で線路を敷きなはれ」と言われるのがオチです。ところが日本中の道路という道路、「一般の国民が一般的に」走らせている車などどれほどあるのでしょうか。おそらく大部分は「企業が企業の営利のために」走らせているクルマに違いありません。国民の税金で維持管理されている道路を、タダで走り回って金を儲けている企業にとって、こんなありがたい補助金はありません。さらにこうなると、公共事業などと名付けられているほとんどのことが結局、お金のたどりつくところを見たら、企業のための事業に違いありません。農業の補助金など実にかわいいものです。むしろ、農業に関して言えば、今までの長い間補助金が投入されながら、ますます崩壊に近づきつつあるということが、他の業界と大きく異なるところで、この問題の方がより重大なことに思うのです。

### 農民は公務員ではない

たとえば、一枚の田んぼで米を作って、その収入が十万円だったとしましょう。ある人が、「そこで

ベットのエサを作つて預ければ二十万円払いませ」と言つて来たとします。さあ、どうしましょう。答は、農民はベットのエサを作ればいいのです。人間の食うものは格が上で、ベットのエサでは格が下、などとわかつたようなことを言つてはいけません。人に上下のある社会かも知れませんが、お金に区別などありません。自由経済の中の農業であり、農民であるはずです。農民は決して公務員ではありません。農民は米を作つて生活しているのではなく、米を売つて生活しているだけのことです。

### 「数え歳」ということ

このごろではめつたに使われることもないのですが、昔は「数え歳」という年齢の数え方がありました。赤ん坊は生まれた時点ですでに一才と数えました。そして正月を迎えるたびに歳を重ねてゆくのですから、例えば十二月の三十一日にでも生まれた子供は大変です。生まれた日が一才で、翌日、お正月の朝が来たら、もう二才になっています。たった二日ですでに二才？ いかにも不合理な数え方ではありません。以前は「昔のヤツラは頭が悪かつてんなあ」で済ませていたのですが、有機農業の百姓暮らしになつてからというもの、かえつて昔の人たちの豊かさをこの「数え歳」からうかがい知ることができるようになりました。

子供は、オギャーと生まれる以前、お母さんのお腹の中で十月十日過ぎして来るのですから、その間も人間として数えれば、生まれたての赤ん坊がすでに一才である、ということのあたりまえの事実になん

気がつかなかったのが、ということですが、逆に、今ではオギヤーと生まれるまでは「人間」でないというのですから、むしろこっちの方が生命を軽んじることはなほだしいと言わざるを得ません。

そしてお正月の話。私は冬の時期、堆肥の材料としての落ち葉を集めるのを日課としています。山の木々は葉を落とし、静かに眠っているようなたずまいですが、目をこらして見ると、そのひと枝ひと枝に、すでに小さな芽をつけているのに気づきます。現代の私たちはもっぱら気温によって春の訪れを感じるようになってきているのですが、たとえ北風の中にも、枝に小さな生命の始まりをつけた時が春だ、という昔の考え方をあなたがち否定することはできません。植物だけではありません。この天地を形づくる自然界のうつろいは、あらゆる生きものの生命のサイクルを従えて、止まることなく流れているのが、どうやら真実のようです。小さな虫は当然としても、実はイヌやネコでもよく見ていると、四季のめぐりをその活動の中に取り込んでいるようです。どうして人間だけがこの大自然のサイクルから逃れることができるのでしょうか。我々は気づかないままに、その大きな流れを内に秘めているのではないかと思えてならないのです。お正月が春の始まり。そして、私もあなたも、動物も、虫も、山の木々も、道端の草花たちも、あらゆる生きとし生けるものが、天地とともに等しく一つだけ歳を重ねる、というドラマチックな約束ごととに昔の人たちの心の豊かさを感じないではいられません。



## 第四章 奈良食べもの学校 後藤勝子さんのお話

奈良食べもの学校については第一部で述べられている。ここでは後藤勝子さんが一九九五年に話して下さった事柄のうち、共同購入会の活動のイメージがよく分かるところを紹介することにする。

### 会員の拡大と活動のイメージ

後藤……：拡販って言いましたけど、拡大販売って言うんですけどね。例えば、ちょっと志のある人が、一人二人いるところがありますよね。例えば、この「食物汚染を学ぶ会」に参加して、わりと熱心な方がね。わたしたちの、この青山もそうだったんですけどね。藪田さんとわたしと二人で。そこへ、そのとれたお野菜をとって持って行ってね、どなたでもちょっとこのお野菜を食べてみて下さいっていうのをやるんですよ。チラシを作っておいてね。各戸にできるだけたくさん配って、何月何日に安く安全なお野菜販売しますから、来て下さいという形で。まあ、何となく興味のある方みんな、見えますよね。本当に半額とか、安く、お野菜、してもらってね、「わたしたちの会の主旨はこうなんです」と。「こんなに環境汚染進んで、こんなに病気も増えて、やっぱり、わたしたちの、努力したらいい物が得られるっていうその努力をちょっとやってね、お互いに生産部門と消費部門で協力してやってみませんか」という呼びかけ



食べもの学校収穫祭（98年）

をして、十人集まるところもあれば、十五人来るところもあれば、五人しか来ないところもあればという形でね、そういう努力をずっと重ねて行って、増えて行ったんです。

現地だね、お野菜をほんと降ろして、核になるような人が大体一人か二人いるような所でね、じゃああなたたちのまわりでやろうというような形だね。本当、飛び火してるんですよ。ぼん、ぼん、ぼんと、そのグループがあるような所がね。だから、わりとやる気のある人の所で、「あなたを中心にしてやるからね」つって、みんなが助っ人に行つて、そこで、宣伝をするという形だね。ここ、青山でも、わたしたちのグループが一番古いんですけどね、一つアパートの中にも、一グループあって、それと、二丁目にも一グループあって。

夏場にわりと野菜がね、夏野菜がいっぱいとれるんですよ。で、ちよつと余りますよね。すると、野菜が余ると拡販やろうかという形になって、陸橋の下でね、もう本当になにか作りの店を作つてね、宣伝して、三年目になるかな、一番下で一つ、若いグループがね、七、八人のグループができました。だから、そういう形で、こちらに手持

ちの野菜がないとね、それができないんですけどね、ある程度は野菜があるときに、増やそうかという形でね。

### 会員の規模について

後藤……だけでも、わたしたちの会の技量としてはね、最高百五十人だなんて、思います。でね、わたしは、前、京都の使い捨て時代を考える会に入ってるときにはね、二千人規模の大きな会だったんですよ。その中でね、枚方のブロックにいたんですけれど、五百人規模くらいの所でね、規模が大きいことはね、誇らしいことかも知れないけども、活動する単位としては非常にまずいんですよ。結局、二千人となると、それを支えるための生産者が無数にいますよね。すると、中央にばーんと、こう、集荷場と云うか、全部集めるステーションが要るんですよ。今度はそのステーションから、各グループへ配送すると思う、そういう経済機構みたいなものができないと成立しないんですよ。そうすると、もう、野菜の鮮度は落ちるし、その生産者と消費者の結びつきも希薄になるっていうんでね。一体何をやってるんだろっていう部分も、あるんですよ。

わたし、その大きな会で、ちょっとブロックのお世話をしたりして、わりと会の機構を見てたもんだから、いい部分もあるけども、五百人越える会になると、悪い部分もあるなど、つくづく思ってたね、こっちは来たんですよ。わたしがこの会引き受けることになって、やっぱりよく見てたら、百五十人からど

うふんばつても二百人までの小規模のグループが、あちこちの近郊農家の人と結びついてね、成り立って  
いくのが一番理想的だと思うんですよ。

例えば、わたしたちは、援農っていうのが大きな柱になってるんですけど、実際にわたしたちも、畑や  
田を見てね、そこで、勉強させてもらうと言うか、手助けなんてのは、足手まといなんですけどね、足手  
まといになりつつも、この野菜がどんなふうにしてできていくのか、見たかったしね。そういう環境を作  
るためにも、やっぱり、あんまり大きな規模だとできにくいんですよ。会の中で、大きなグループだ  
と、どうしても、本当のひとにぎりの少数の人が活動してね、そのほかの人はただ野菜もらうだけの関係  
になっていってしまうし、そうなることやったり、何やってるかわからないってことになるんでね。それ  
で、まあ、今んとこ、まあまああの平衡を保ちつつ、生産者と消費者の関係が、ほぼ理想的にいつてるん  
じゃないかなと思うんですよね。

### 会員の力を引き出す

後藤……もう、みんなそれぞれ力持つてはりますからね、その力をちよつとでもどつかで出したら、こ  
れがこう束になったときはすごいなって、わたし、いつも思うもんですからね。わたしは、本当に、電話  
番でね、本当に単なる電話番号で、みんながやらんとできひんからねって形で、この会は成り立ってる。だ  
から、ほとんどの人が仕事を片方で持ちつつ、片方でこの会やっています。だから、専業主婦って方はとっ

ても少ないんですよね。見本としては、誰にでもやれますという。みんながその気になればね。今の世の中では、ちょっとこういう形でないかね、本当にいいものつてのは作りもできないし、手にも入らないですよ。省農薬野菜とかね、省農薬の米とか言いますよね。店頭で売られてるけども、あんな信用できないもの、ないですよ。だって、顔が見えないということはね、お互いに顔が見えないということは、ラベルがね、市場で売ってるっていうのね。ペタペタ貼ればそれで付加価値がついて、高くなってるね、買うとき、何となくそれ買うなんていう、そういう形でしかないんですよ。だから、野菜もらうとき、あの人の野菜やと思うともう、少々ひん曲がっても、トウがたつても、食べられんような野菜も引き受けるということになりますしね。情が通うと言うのか。情だけでは行かないけどね。だけど、本来の野菜の姿っていうのは、そういうものでしょう？

この頃、本当に思い知ったことなんですけどね、普通、流通機構に乗るっていうことはね、経済機構に乗るといふことなのよ。そうするとね、経済機構に乗るってのはどういうことかちゅうと、多くの消費者がこの物を作るということよ。すると、多くの消費者がこの物が、例えば見た目がいい物だったら、見た目がいいようにしか栽培した物しか、通用しないのよ。だから、まっすぐのキュウリとか、やたらきれいなナスビとか、そういうふうになっていくのよ。もう一つはね、輸送の問題ね。いろんな地域から入ってくるわけでしょう？遠隔地から。そうすると、輸送のためにね、この箱の中に入る、規格サイズを作らないといけないわけよ。これからはみ出した物は、ちょんぎるわけよ。はみ出した物は最初からは

ねられるわけよ。そういう物しかわたしたちの食卓にこないようなシステムになってるわけね。でも、実際に、畑に行つてできる物つて、そんなもんじゃないでしょう？ だって、曲がるし、色はあせるし、はじけるし、当然、自然体で行つたらそれになるわけだしね。だから、消費者が「それでいいよ」つていつて、言わない限りはね、そういう物もらえないわけだね。だけど、言つたつて、今度、生産者が、全然、何も声の届かないところにいたらね、やつぱり、その中間にいる人の意向にだけ沿うようになって行くでしょう？ だから、例えば、曲がつたとか、汚いとかはじけたとかいうの、全部商品化できないし、できたとしても二足三文で、クズ野菜として売られるわけよね。だから、作るほうもわたしね、工業生産的な作り方しかできないと思うの。

#### 農協出荷の問題点

後藤……農協に出すときは、例えば大根なら大根とか、エンドウならエンドウとか、単品をいっぱい作るわけよ。単作をするわけよ。そうすると、単作をするということはね、ものすごく病気が発生するちゆうことなんよ。発生したら全滅するでしょう？ だから、みんな全滅しないように、農薬いっぱい撒くわけよ。形を整えて、もうそればかりに専念してればいいもんね。だから、農協に出すときは、農協の規格のサイズにあったものをたっぷり農薬かけて、化学肥料を使って、出すわけね。だから、ある程度評価されれば、収入はいいと思うよ。ただし、その規格に合わないものしかできなかったときは、全部はねら

れるからペアよね。

でも、わたしたちはやっぱり、一種類ばかり契約して作るんじゃないかって、できれば多品目って言うの？ できたら、五〜十品目のね、多様なものが欲しいわけでしょう？ 食卓の上には乗せたいから。たくさん作って欲しいわけよ、品目を。そうすると、こういうやっぱり昔ながらの作り方になっていくわけよね。そうすると、たくさん品目を作るってことはね、実害が少ないってことでもあるの。例えば、ホウレンソウとこれがやられてもね、ネギとキャベツとこれは残るとかね。ただし、ちよこちよこ作るってことは大変手間がかかるってことね。例えば、連作のきくものだったら、毎年でもそこへ作れるけど、連作のきかない、例えば夏のナス科のものね、ナスビもキュウリもそうだけどね、トマトも。そういうものは点々と、計画して、畑変えなくちゃいけないわけよ。そういうことしなくちゃいけないでしょう？ だから、計画的にいろんなもの作っていかなくちゃいけないわけね。その作業もやらなくちゃいけないしで。だから、単作の場合は、毎年作ってもいいように、いろんなもの撒いて、同じ年に毎年作る。だから余計、被害が出る。だからもつと薬を入れるって形になるのね。

それを例えば、消費者の側がうんと評価して、今まで五十円で買ってたものを八十円で買いましょうってなれば、その時点でちよつと収入が増えるってことよね。それしか考えられない。でもね、今まではその無農薬の野菜ってのは、高くて当然だって意識がみんなの中にあるわけよ。だけどね、わたしたちはやっぱり、片方でわたしたちも頑張って手を出すから、価格を、平衡感覚で通じる範囲のね、主婦価格に

抑えようっていうのが、暗黙の了解でね。生活を圧迫しないもので安全なものをね。そのかわりわたしたちも手を出しましょうと。力を出しましょうと。そういう感じでみんなきてるからね、わたしたちの野菜は安いです。だから、安くなるように、安くいいものをね、自分たちでやろうってことで、その気持ちを含めみんなもってる。だからね、お茶なんかね、パイロット事業で、山切り開いたところから、岩田さんの方にお願いで、ずっときて、もう今年で丸八年過ぎただけどね、そうすると、毛虫とりの援農に行ったりね、萱敷きを手伝ったりと、それを毎年続けてきてるわけよ。だから、愛着もあるし、それだけ手を出したんだから、わたしたちもやっぱり、安くお茶をね、手に入れたって気持ちがあるよね。そうすると今度生産地から、わたしたちの会は、色々な、自分たちが手を出す部門が決まってるのね。例えば、米係とか、お茶係とか果物係とか会計って形でね。

そうすると、お茶係に当たったら、グループで引き受けるわね。そうすると、生産者の所から何十キロという単位でお茶がドンとくるわけですよ。今度、きたら、それをひとり百グラムとか二百グラム単位にね、小袋に分けたり、そういう作業をわたしたちが自分たちでするんですよ。そこんとこ、もし、しなかったら、百グラムにつき百円ね、加算されるわけね。現地から包装詰めできたら。だから、そこんとこで手を出して、マイナス百円にしましょうという。そういう努力をみんながしてるの。みんなに普及させたいっていうのもあるの。だから、全部それはもう、お茶係になったら、お茶の生産者との折衝からね、買い付けから販売から全部するわけね。で、米係は、米の生産者と、全部交渉して、全部。配送は配送の



生産者がやってくれるんだけどね、そこへ荷物を出すところまでの、諸々の仕事全部ね、やるっていう、そういう形です。

### 配送のシステム

後藤……水越さんとこを一応ね、ステーションにさせてもらってるの。本当は、どこかにステーションがあつて、そこへものが集まつて、そこから分散していくっていう形がとればいいんだけど、そのためにはやっぱり、事務所を建て、場所を確保する資力、財力があるのね。やっぱりその資力、財力がばーんと最初からある場合はいいけど、まだわたしたちはそこまでお金がないからできないし、先々やっぱり小さな掘っ立て小屋でもあるほうがいいかなとは思ってますけどね。

わたしたちの野菜は、畑からわつと引き抜いてきてね、秤にどつとかけて十キロという感じでね、コンテナにどわつと入れて、土のついたまま。そのままトラックでドンと一箇所、わたしたちの、ここのグループだったら十三人いるんですけどね、一軒のおうちにどんと、ガレージ借りて、そこへ降ろしてくれるんですよ。そこへね、わたしたち夜八時からなんだけど、みんな集まつてきてね、野菜をばーつとその場で仕分けして、もっていくという。だからね、もう、それ始めて八年でしよう？ そうすると、そこへ、よもやま話が始まつて、料理の話から、子育ての話から、諸々全般に渡つてね、結びつきが大変強いね。だから、例えばワンパツクになつてね、いい野菜がポンと玄関に置かれてね、「ハイそれまでヨ」

じゃあないのよね。だから、面倒よね、確かに。仕分けしたりね、野菜ゴロゴロ、夜引いて帰ってくるとかいうのね。面倒だけど、それを乗り越えてしまったらね、大変いい人間関係ができてるんですよ、今。

わたしはもうね、自分が是非欲しいと思ってることだから、全然大変じゃない。常時、十五人前後ね、このグループでいたから、いるつちゆうことは、まあ、いいつちゆうことじゃないかな。嫌やったら、まあ、ぼつぼつやめられた方もたくさんいるのよ。でも、また、入れてって見える方もいてね、何となく十五人前後でね、行きつ戻りつしてるから。だから、わたし自身が一番思うことはね、こういうことやるのもう、負担かけて、強制があつて、規則があつてね、がんじがらめでしんどくなったら、何してるかわからないから、やりたい者がきてやるっていう形で、アミーバー状の流動体が一番理想的だと思うのね。

## 援農

後藤……一番しんどいのは、田んぼの、田の草とりなんです。これももう、六月の中ぐらいから七月の初めにかけてね、八人ほどの生産者がいるんですけどね、そこへその、草が生える時期は一緒でしよう？　そこへぼつと行かなくちゃいけないわけね。するともう、完全無農薬でやろうと思つたら、草はすごい勢いで生えますからね、除草機は、あるにはあるんだけど、そんなもんではおつつかないのね。だからやっぱり人海作戦で何回か入らなくちゃいけないですよ。やっぱりあの労働力はとても生産者

だけでは無理なんでね、わたしたちも手伝いに行くんですけどね。ただ、水越さんとか、もう三軒くらいの方はね、カブトエビっていうのが出るんですよ、田に。あのカブトエビがちょうど草の生える頃に草を食べるから、除草をやってくれるんで、その畑はそれほど手をかけなくてもいけるんですよ。

ところがね、山間部の室生村とかね、それから、柳生の丹生町ってあるんですけどね、あっちのほうはね、もう、イネミズゾウムシも発生しやすいしで、草、とにかくすごい生えるんですよ。遠隔地だけどころへ行かなくちゃいけないですよ。あれは人海作戦だからなるべくたくさんの方が行けば短時間できるんですけども、人が集まらなくて四、五人で行くとね、やっぱり一反の田をやるときなんて大変。田んぼに入ったことありますか？ あれ、引き戻せないでしょう？ 下手だからね、いっぱい残るのよね。まああとから生産者に「おれ、入ったよ」とか言われてね。そういう形でね。だけど、生産者の方もあてにしてはる人もいるし労働力としてね。それから、あてじゃないんだけど、みんなが来てくれたら宣伝になると。

その無農薬、完全無農薬で作ってる人って、みんな、村の中でね、特別扱いと言うかね、「妙なことやとるな」と。そういう目で見られてるんですよ、半分。バカなこととは言わないけども、本当にあれでいけるんかいなって。そこへみんなが、応援部隊がわつと行くとね、「ああ、あんだだけ消費者と結びついとるんやな」ということで、再評価と言うかね。去年、一昨年のような米の狂乱がありましたよね。あそういう状態があったときには、無農薬が見直されると言うかね。何しろ強いんですよ。それほど実害が

ね、それほどなかったんですよ。まあ、少なかったですけどね。だから、その田の草とりの面があるでしょう？ それから今度はもう田の草がとれなくなつて、稗とあれでほうほうになった田んぼもあるんですよ。そういうところはね、稗を、稗切りに行くんです。稗の穂が出たのをね、収穫前にはさみで切りに行くんです。そういう作業に行つたりね、それから、お茶なんかの毛虫をとりに行つたり、お茶の下に生える草を挽きに行つたり、秋に萱敷きつてのがあるんですけど、乾燥させた萱をね、お茶の根元に敷いていくんですよ。草が生えないし、それで堆肥になるっていうんでね。それは大変しんどい作業ですけど、それに行きます。

## 第五章 世代交替

### 「会」の現状

先に紹介した食べもの学校の後藤さんのお話を手がかりに二〇〇〇年二月に枚方の「会」の事務所で、小林美喜子さん、「会」の専従をやっている上田マス子さん、「会」の生産者の中嶋泰人さんに「会」の現状について語っていただいた。

まずは今の若い人たちは、ということでも議論が盛り上がる。「会では個人配送もやっていますが、例外的扱いです。共同購入のよさは分かっていますが、体調悪いときなど人とのつきあいがいやになるときもある。年齢差もあり、若い新規の人とつかれた人とが一緒にやるのは大変」と上田さん。「一緒にやるのがいや、という社会になってきた」と中嶋さん。

群れるのを好まない若者たちが増えていく中で、でも「群れることの楽しみに気付く人はいるし、また、若い人が群れないのは、かしこさがあつて、群れることをとどまらせているように見えます。個人的にみれば若い人のセンスはいいと思う」と上田さん。

若い人たちは野菜を食べる量も少ない。「昔のこと思ったらよう食べてきた。今の状態は作る方だつて気の毒だと思う。日保ちしないし量も多い」と中嶋さん。昔と違って今は外食の機会が増えていることも



枚方「会」沢田さんのレンゲ畑で（2001年）

ある。

共同購入会も起ち上げた時の小林さんらの第一世代はすでに企業で言えば定年の年代である。そして、「会」も「食べもの学校」も二代目三代目にバトンタッチされている。でも総体として平均年齢は上昇していて若い世代とうまく結びついていないのが悩みだ。

「小林さんの時の勢い、盛りあがりを思い出して、あの時をふたたび、というのは一寸無理だと思う。でも当時と比べ、すそ野は広がってきた。食べ物のニセモノ、ホンモノは一人一人が決めることで、スーパーでは判断材料が与えられないという現実がある。だからやはり会がいい、という人たちは居るんです。情報がいっぱい流れてくるし、学習もやりやすい」と上田さん。

「会」の日常運営については世話人会が月一回開かれる。ここで基本的な問題について議論される。世話人会代表のもとに月一回生産者会議が開かれている。あと日常的なことは運営委員会。事務的なこととお金の管理は有給の職員があたる。他にそれぞれが勝手にやりながらのイベントや学習会が年に三〜四回ある。

「会の共同購入も生協の産直と同じイメージでやっている人がいて、一つの時代は終わった、という感じ」と中嶋さん。毎週配送して、会員と接しているの発言だ。

会の規模についての後藤さんの考えに賛同しながら「皆それぞれの生き方があると思うけど、野菜を食べるということを皆でやってきて、皆でやってくることの楽しさを知った。そういうことの積み重ねで、この気持ち皆に伝えられたらいい。群れながら年をとれたらいい」と上田さん。

「会員が増えるかどうかは会員の気持ち次第。会もまがり角に来ていて、どうしたら若い三十代、四十代の人、年配の人に野菜を食べてもらえるか。でも若い人は考えも言ってくれるし、やりましようかというとき、段取りさえ決めればやってくれる。私の考えおよばないことを言ってくれるから助かってます」と上田さん。

### 「会」の将来

「会はお金と理念、その他にもあるけど、理念だけの団体やたら政党や。理念と事業が軸になっているのが会」と中嶋さん。「他の共同購入会にかかわると、環境問題のグループへの参加をすすめられたりするようですよ」と小林さん。つづけて「それぞれがやりたいことをしている。それがまったく暮らしにつながることがあるかも知れないが、暮らし、子育ては全部につながる。会員がやっていることを表に出してあげられるよう、組織自体がネットワーク的になればいいと思う。地域でいのちと健康、環

境、これらの問題でどうやってネットワークをつくるのか。枚方市の行政とかかわって、健康、環境、生き方などが行政の課題になっていることが分かりました。以前よりお互いの間に歩みよりがあるので、そのへんで、運動体はリーダーシップをとれるでしょう」と。

生協の産直との違いについて、配送担当が生産者自身だという点が大きい。「配送に行ってお茶が出る。話しをしているのがいい。生身の人間と話が出るからいい。話に野菜がついてきている。そこが産直と違う」と中嶋さん。

先の小林さんの発言に「時代の新しい流れの中で、また旗をふってほしい。ここでふってほしい、と皆が思っているときにふってほしい。年一回でも二回でも。こういう人が居ることを会員に知ってほしい」と中嶋さん。

ここから話は次第に夢の方に移っていく。「私はね、最終的には寝起きを共にする共同体、助け合いの共同体、家族的な感じの共同体をつくりたい」と小林さん。「野菜での提携、他人といこい、わしは老人福祉は不健全なので反対や。老人でも百姓仕事はできる」と中嶋さん。

「若い人はシングルイッシュューではダメで、トータルを求めるところがあり、スポーツも色んなことをやっています。インターネットもそうで、地域通貨が導入出来たら、活動の幅が広がりそうです」と上田さん。



## 「会」の認証への取り組み

この語り合いの後、「会」では有機農産物の認証を受ける準備が進められた。二〇〇〇年二月に行われた生産者交流会で初めて認証問題についての話し合いが行われた。というのも、有機農研京大会の後、兵庫県有機農業研究会が認証団体となっていて、そこで認証を受けることが可能になっていたからだ。

翌年一月、有機JAS法が四月から施行されるということもあり、JAS法を学習しようと、兵庫県有機農業研究会に話をききに行った。二月には世話人会、生産者会議、生産者交流会でそれぞれ話し合いを重ねた結果、「会」の農産物の目安として、有機JAS法に沿って生産者と消費者が畑を見分けることになった。

三月には中嶋農園、谷農園、沢田農園の畑を生産者が作成した地図を見ながら点検、倉庫や育苗ハウス、堆肥場も見てまわった。四月には兵庫県有機農業研究会の保田茂さんを迎えて二十名で中嶋さんと谷さんの畑を点検、水路、あぜ、堆肥等問題なく、認証申請の書類を作成することになった。八月八日付けで書類を提出し、二〇〇一年九月十六日に認定がなされた。

書類作成の苦労について、中嶋さんは次のように書いている。

「ところでこの認定の為の書類作成が思いのほかたいへんな作業になりました。例年のない猛暑の続くころ、昼の仕事を終えて、夜事務所に集まって書類作りに没頭したのですが、何しろ少量多品目栽培ですから、五十種類に及ぶ年間の野菜全てにわたって、その作付面積収量を、田畑の一枚一枚ごとに二年間さ

かのぼって記入し、さらに今年一年の予定作付についても同じように記入しなければなりません。みんな田畑ではベテランの百姓ですが、細かい数字の作業になるともうアキマせん。何度も下書きをやり直し、ようやく清書して提出しても、不備でつき返されて来ます。半月かかってようやく書類が整ったとして、田畑の実地検査までこぎつけましたが、ここまで来れば、あとは長年の実績もあって、クレームもなしに今回の認定となりました」

「会」の生産者が一般に販売するときには有機認証のシールを貼ることができるようになった。もつとも「会」の内部ではシールを貼る手間とシール代を節約するため、これまで通りのやり方を通して

## 第六章 若者たちはいま

### ニユースタートとの出会い

事の起こりは九九年にニユースタートの二神能基さんを招いて、大阪で大学生の不登校について考える会を開いたことだ。私は何かピンと来るものがあり、この講演会に竹村さんと呼んだ。話の内容は大学生の不登校が増えてきて、若者たちがひきこもっている。これを何とか出来ないか、ということで農業体験塾のようなものがけっこう役に立つ、ということだった。竹村さんも発言し、農業体験をしたければ、いつでも来て下さい、と言ってくれた。

この会合には予想をこえて七十名くらいの人たちが集まり、ニユースタートとして関西でもひきこもりをかかえた親たちのサポートをする例会を月一回開くようになった。昨年からは関西の活動も多様化し、ひきこもりから脱出してきた若者やそれを支える若者が、鍋の会や、ニユースタートクラブなどのサークル活動を開始し、ひきこもりの人たちを一時あずかる寮も作られた。

今年に入って、サポートする活動が事業として成立する見通しがたったことで、その事業の経営をどのように進めていくかが検討され、ワーカーズ・コレクティブ化を援助するワーカーズ・コレクティブサポートセンターも発足した。株式会社のような一般企業にすれば、人は雇われて働くことになり、お金の

人間関係をつむぎ、お金で問題を解決していくことになる。ひきこもりの当事者たちは、このような一般社会の生活になじめなかつた人がけっこう多い。だから、お金のいいなりになるのではない事業のやり方、参加者皆で管理、経営するワーカーズ・コレクティブを選択したのだが、このやり方は、例えば十人のメンバーが居たとして、このメンバーだけではうまくいかないのだ。生協のワーカーズ・コレクティブでも、一つのワーカーズ・コレクティブがあれば、何万世帯という生協の組合員が、それを支えているのだ。それで、ニュースタートのワーカーズの場合、それを支えるサポートセンターとセットにして出発することになった。そして、十月には協同組合NSワーカーズが設立された。

### 人が育てなくなった

一昔前なら食品公害が問題になり、安全な食品を求めることが運動として成立した。いまもこの運動は継続しているが、しかし、ニュースタートがかかえているのは、若者がいまひきこもっている、という人間そのものの人生の危機にどう対応するか、ということなのだ。人が社会的に育てなくなっている。何故こんなことになったのか、その社会的背景を簡単にみてみよう。

基本的な問題は、「いい学校を出て、いい会社に入って、勤続三十年でめでたく退職」というようなライフサイクルがほとんど崩壊していることだ。大企業も含めた株式会社自体が、あと三十年もつかどうか分らない。だから、親によって必死に勉強させられてきたよく出来る子供たちの受け皿がなくなってい

る。新しく学校を出た子の半分はフリーター、あるいは無職という形でさまようことを余儀なくされている。

いわゆるパラサイトシングル（親と同居する二十代、三十代の独身者）が一千万人と推定され、その中でフリーター、無職が三百万人位、そしてその中にひきこもりが百万人近くいる。このような労働力の構成が、九〇年代の「失われた十年」でつくり出されたのだ。

これはある種の社会公害という他はない。社会公害で、若者自身の社会生活が被害を受けている。

ところが、ひきこもりは心の病いとみる見方が支配的で、メンタルケアや投薬で何とかなると考えている人が多い。そうではなく、社会に出るべく受けてきた教育が目標としていた社会自体が衰弱しているって、出て行きようがなくなっている。こちらの方を何とかしないと、問題の解決にはならない。

そこでニュースタートは、安全な食品を求める運動と同じような発想で、自分たちで働く場をつくり出す運動に取り組み始めたのだ。ひきこもりの人たちにメンタルケアをすることからは運動をつくれないう。株式会社とは別の「もう一つの働く場」をつくり出すことがいま求められているし、これは新しい社会運動として、持続可能な社会システムを形成していくことにつながっていくだろう。だいたいこんな考え方で進んでいくことになった。

## 農業学校の再開



ニュースターの稲は無残（2002年）



流しソーメンの準備（2002年）



のらの会20周年収穫祭（2002年）

ニュースターの運動がこのように進んでいく中で、「いつでもおいで」と言ってくれていた竹村農園に若者たちが訪れたのは今年の五月のことだった。前日から泊まり込み、田植えをし、次の日はもちつきと焼き肉パーティをした。

そして、自分たちで植えた稲の成育を見守るべく、八月二十四、二十五日の二日間、再度訪問した。その時見たのは、草取りをしなかったため、水草に完全に負けてしまったよれよれの稲だった。棚田の前後

にある稲は見事に実っていた。こんなことがあって、やっと竹村農園での農業学校の構想がまとまった。

具体的な打ち合わせは、十一月二十三日に開かれた、のらの会二十周年の収穫祭で、ということになった。収穫祭は好天にめぐまれ、竹村さんの友人と一緒に入植した小野さん、水越さん、それに段田さんも参加した。合わせて六十人を超える集まりとなり、のらの会の皆さんが手巻き寿司やブタ汁を用意して下さった。メインゲストは奈良の井上さんと、ケーナの演奏があり、サポートセンター代表世話人の山添純さんも飛び入りで歌った。

この日もニュースタート関係者は二十名近くで、今年になって私は三回一緒に来たことになるが、毎回来ているメンバーも数人いた。竹村さんとの打ち合わせで、今年田植えをした一枚の棚田を来年も使わせてもらえることになり、今度は稲刈りまでに五回位、草取りなどの世話に来て、竹村さんに指導してもらおう、という計画だ。子どもたちと一緒にやっていた竹の子学校の継続であり、若者たちが来るのだから若竹塾ということだろうか。この場で、この本の物語の続きが紡ぎ出されることを期待している。

## あとがき

彼等の生きざま。私が受け取った魅力を表現し伝えなかった。こんなに素晴らしいこと、というよりもシビアなアプローチで淡々と自分を示していく姿勢に着目すべきだ。「何でそうするのだろうか」と感じることには理由が必ずあると、私は思う。ひとりの人間の営みとしてその場所を選びその方法を選び永々としてやって来た姿と年月に感動するのだ。決して美談ではない。

大したことはないのだが十四才から自分の脊椎が曲がり始めて、X線で写されたその骨の写真を見たり、十九でアトピーを患って困っていた頃、当時はあまり自覚もなかったけれど、それらは奇病だな、と今になってわかる。脊椎側弯症、様々な皮膚炎、最近増加した病気だ。一体どうしてなのだろうか。わかろうとすれば結構わかって来るものである。自分の身体のことだからほかに任せにしないでしっかり向き合って自分のものにして行こうと考えていた。身体と向き合ってみえたことは多い。それを取っ掛かりに自分の身体から魅力あるものにしていきかけた。健康という切り口で立ち止まりいわゆる医食農を地で行っているようなものだ。

大学の農学といえばバイオテクノロジーを駆使した緻密な研究が多い。自分でスタンスを持たなければ、大学での農学で農業の現状を知ることではできない。まちで育った現代人が農学の世界に触れ憧れも含め農



業という職に就きたいと思うようになった。農学に触れた人はどこへ行くのか。農学に携わって見えるもの。見過ごしてはいけないものがそこにはあると思う。そして出会った人たちは私の心に沁みた。あまりにも多くのことに気付いた。たぶん職とは職業の意味より天職の方だろう。自然に畏敬をはらい生きる姿がとも文章に表し切れず力不足だが、私の言葉で語ったことが目に触れた人に鮮明に映るよう願うばかりだ。ずっと有機農業に関わっている人たちには感謝の意を、今更に歩く蟻の様な存在の私と力強く生きていく貴方に新しい元気を。四年間みなさんに呆れられながら読めるものになり得た。淡々と次へ行こうと思う。

二〇〇〇年八月

藤田美佳

企画をはじめてから、丸八年たってしまった。やっと原稿を入稿し、年内には仕上がることになった。関係者の皆さん、本当にお待たせしました。五人の生産者の皆さんの文章は、九四年末のものそのままだが、校正で目を通してみても、少しも旧びていない。時代はゆっくりとだが、帰農の時代へと移って行っている。

この八年の間に、段田さんと小野さんは他の仕事に移った。竹村さんは自称定点観測者だが、自分がこの地で農をなりわいとして行っていることで、世の中の変化がよく分かる、という。恐らく九九年からの四年

間、いわゆる世紀の変わり目が、やはり大きな変化の年であった、という認識では一致できるだろう。

私自身もこの間、自分でも驚くほど色んな人々とネットワークを結ぶことができ、念願だった竹村農園での農業学校の再開にもメドがたち、そして何よりも、この物語に締めくくりをつけることができた。

さて若干私事にわたることを許していただきたい。私は九〇年代初めに、有機農業にたずさわっている人たちを取材し、本にまとめる企画を思いたち、出版社スペースゆいを発足させて、これまで六冊の本を発行してきた。桜井昭人さんを取材したブックレット『にわとりと共に生きて』（鈴木勇子著、九三年）を筆頭に、九四年には泉北生協（現エス・コープ）の生産者今野正章さんを取材した『百姓新時代』（角野有香著）、保田茂神戸大教授の著書『有機農業運動の到達点』、市島町有機農業研究会の二十年を取材した『ほんものの食べものを求めて』（川崎洋子著）、京大農業ゼミの調査園になっている仲田さんのみかん園を取材した『ここはみかんの適地なんや』（加川真美著）、そして最後は飯沼二郎京大名誉教授の著書『有機農業を志す人のために』、の五冊を発行した。

でも出版をやってみて分かったことは、一人の専従職員をかかえるなら、年に八冊位の新刊本を発行しないとやっていけない、ということだった。もともとスペースゆいの発刊の言葉は、「何ものか」に支配され、あくせく働くことのでかえって、社会の存続を危うくしてしまっている現実を、何とか、この「何ものか」を制御することで持続可能な社会への道筋をさぐるろう、ということだったのに、「何ものか」に支配されないと、会社としては存続できなかったのだ。

出版社の存続のための出版活動は望むところではないので、色々な副業で会社の存続をはかろうとしたが、大不況の九〇年代には勝てず、法人格としては休業することにした。たまたま私もかかわっている社会システム研究所で論集『社会システム研究』（一九九九年発行）の出版のお手伝いをしたことがあり、今回の出版の発行元をこの研究所にお願いすることにした。この研究所の研究活動は、ここ数年の世の中の変化でメンバーが実践活動に忙しくなり、中断しているが専従職員を置かずに出版活動を続けることから、新しい方向性が見えてくるかも知れないと考えている。

さて、今回色使いのきれいな表紙を描いて下さった山崎圭子さんとは地域通貨キョートレッツで知り合った。レッツは私にとつて人材バンクとして機能している。また出版実務について素人である私が本を出せるのも印刷所の協力があるからだ。『社会システム研究』までの七冊は東京の万里印刷の大澤博さんにお世話になった。万里印刷は廃業してしまったので、NPO法人ニュースタート関西事務局が発行した『引きこもりは病気ではない』（二〇〇一年発行）からはプランニングRの太平雅之さんにお世話になっている。今後もよろしくお願したい。

二〇〇二年十二月四日 境 毅

## 各団体の連絡先

枚方・食品公害と健康を考える会

〒573-0041 大阪府枚方市山之上東町9-9

Tel.0728-44-4021

Fax.0728-44-2006

奈良食べもの学校

〒630-1881 奈良市青山7-158 後藤勝子

Tel&Fax.0742-27-2406

滋賀のらの会

〒520-0531 滋賀県滋賀郡志賀町小野水明2-2-3 井元洋子

Tel&Fax.077-594-2707

NPO法人 ニュースタート事務局関西

〒569-0826 大阪府高槻市寿町3丁目29番19号

Tel&Fax.072-693-0563

URL <http://www5b.biglobe.ne.jp/~newstart/>

## 執筆 者

藤田 美佳 1973年生、96年京大農学部卒  
中国漢方の店勤務の後、イギリスへ。  
現在ロンドン郊外在住、WWOOFで活動中

竹村 弘 1956年生

段田都紀雄 1949年生

水越 寛宣 1958年生

小野 祐次 1959年生

中嶋 泰人 1949年生

境 毅 1941年生 生活協同組合エル・コープ理事

## 表紙デザイン

山崎 圭子 京都精華大学陶芸学科在学中  
「土とたわむれている。たべること、つくることが大好き」

## 出版物のご案内

### 社会システム研究所発行

- (1) 『社会システム研究』 創刊号(1999年)  
A4版168頁、定価2500円
- (2) 『帰農の時代にさきがけて』 藤田美佳・境毅編著(2002年)  
A5版160頁、定価1500円

### 有限会社スペースゆい発行

- (3) 『にわとりと共に生きて』 鈴木勇子著(1993年)  
ブックレット64頁、定価800円
- (4) 『百姓新時代』 角野有香著(1994年)  
新書版127頁、定価1500円
- (5) 『有機農業運動の到達点』 保田茂著(1994年)  
新書版126頁、定価1500円
- (6) 『ほんものの食べものを求めて』 川崎洋子著(1994年)  
新書版128頁、定価1500円
- (7) 『ここはみかんの適地なんや』 加川真美著(1994年)  
新書版126頁、定価1500円
- (8) 『有機農業を志す人のために』 飯沼二郎著(1994年)  
新書版142頁、定価1500円

上記の本の注文を受けつけます。(4)～(8)は頒価を1000円とします(送料当方負担)。郵便振替で申し込んで下さい。

郵便振替 口座名 社会システム研究所  
口座番号 01040-7-33939

## 帰農の時代にさきがけて

---

定価1500円

発行日 2002年12月25日初版

編著者 藤田美佳

境 毅

発行者 境 毅

発行所 社会システム研究所

〒600-8691 京都市下京区

京都中央郵便局私書箱169号

郵便振替 01040-7-33939

口座名 社会システム研究所

印刷 プランニングR







定価1500円

イラスト：山崎圭子